〒371 前橋市上泉町664－4
前橋市教育委員会管理部文化財保護室
TEL 0272－31－9531

稲荷山古墳

1988年
群馬県前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山を望む関東平野の北部を市域とした県都であります。北から南に貫流する利根川の清流は「水と緑と詩の町」を潤し、かつては「糸の町」として養蚕製糸で栄えてきました。今、人口２８万を擁し生涯教育都市を目指し教育文化、商工業の調和のある街づくりが進められて、都市再開発事業、土地区画整理事業、前橋工業団地、住宅団地の造成事業など盛んに進められています。当遺跡の所在する総社町付近は昭和３６年から前橋都市計画第１土地区画整理事業に隣接し、現今は民間開発も活発に進められております。当稲荷山古墳の周辺には国指定の文化財も多く総社二子山古墳・宝塔山古墳・蛇穴山古墳等古墳文化を基盤として律令体制の中にあって元総社町に国府が設けられ・上野国山王廃寺塔心柱根巻石・総社町の石製鴟尾・国分寺等が建立され上野国の政治・文化の中心地として良く知られた地域であります。この度稲荷山古墳が宅地化により失われる事になり不得心ながら記録保存したもので、その結果古墳時代後期の横穴式石室を持つ墳墓が確認された事は、総社町古墳群の歴史的性格を知る上で貴重な資料となるものと思慮しています。

昭和６３年９月　　前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　二　瓶　益　巳

例言

1．本書は都市計画法第29条（開発行為の許可）の宅地造成事業実施に先がけ、開発区内の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は前橋市教育委員会のもとに組織された、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団　長　二瓶益巳）の委託を受けスナガ環境測設株式会社（前橋市青柳町２１１－１・代表取締役　須永眞弘）が実施した。

3．調査担当者　遠藤和夫（前橋市教育委員会文化財保護係主任）
　　新保一美（　　〃　　嘱託）
　　金子正人（スナガ環境測設株式会社専務取締役）

4．遺跡名、所在地、調査期間及び調査面積は下記の通りである。
　遺跡名　稲荷山古墳遺跡　略称　６３Ａ－３５
　所在地　前橋市総社町１７４６－１、１７４６－２、１７４７－２
　調査期間　発掘調査　昭和６３年６月２０日～７月２０日まで実施した。
　調査面積　５５８㎡

5．本調査における出土遺物は、前橋市教育委員会が保管している。

6．本書はスナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部が作成に当たり、執筆編集の総括を金子正人が行い、遺構のトレースを吉田公夫、版下作成作業を鈴木赳夫、遺物実測を佐々木智恵子・角田朱美が当り、作業事務を柴崎信江が行った。

7、測量業務の指導監督は須永眞弘（測量士第５２６１４号）が行い測量業務を板垣　宏・須永嘉明が行った。調査の安全管理は石島正二・安藤直人が担当し調査助手を荻野博巳・白石光男・長島郁子が担当した。

8．発掘調査に際して多大な御協力を戴きました穂積娃男氏や地元市民の方々並びに調査及び整理に際していろいろと御指導・御助言を賜った各方面の方々に心から感謝申し上げます。
　群馬県教育委員会文化財保護課
　群馬県埋蔵文化財調査事業団
　群馬県立歴史博物館

9．調査に参加した方々は次の通りであります。記して感謝致します。（順不同）
　石井きよ子、　師岡はつ江、　近藤充郎、　河西光明、　小林康典、
　藤田光夫、　川端惣太郎、　水澤和子、　長井武之、　近藤俊男、
　中川類子、　大崎知彦、　石川サワ子、　内山恵美子、　関口定子

目次

序
例言
目次
第1章　発掘調査に至る経過 …… 1
第2章　稲荷山古墳の立地環境と周辺遺跡 …… 3
第3章　調査の概要
　1　基本土層 …… 6
　2　稲荷山古墳に関する記述 …… 6
　3　墳丘の調査 …… 8
　4　石室の調査 …… 8
　5　石室の構築状態 …… 8
　6　石室壁体 …… 8
　7　石室の裏込 …… 13
　8　封土 …… 13
　9　葺石 …… 14
第4章　出土遺物
　1　墳丘・前庭出土遺物 …… 14
　　埴輪 …… 14
　　土師器・須恵器 …… 15
　2　石室内出土遺物 …… 25
第5章　まとめ …… 25
第6章　近世の石造物と遺構 …… 27

図版目次

埴輪実測図 …… 17
埴輪実測図（断面と拓本） …… 18
調査区内出土遺物（馬具・鉄製品・須恵器拓本） …… 21
土師器・須恵器（高坏・坏・高台付埦・蓋） …… 24
近世遺物（菊皿・石臼） …… 30
銅銭・和鏡拓本 …… 31
庚申塔拓本 …… 33
縄文土器拓本 …… 45
調査状況写真 …… 図版1
出土遺物写真 …… 図版3

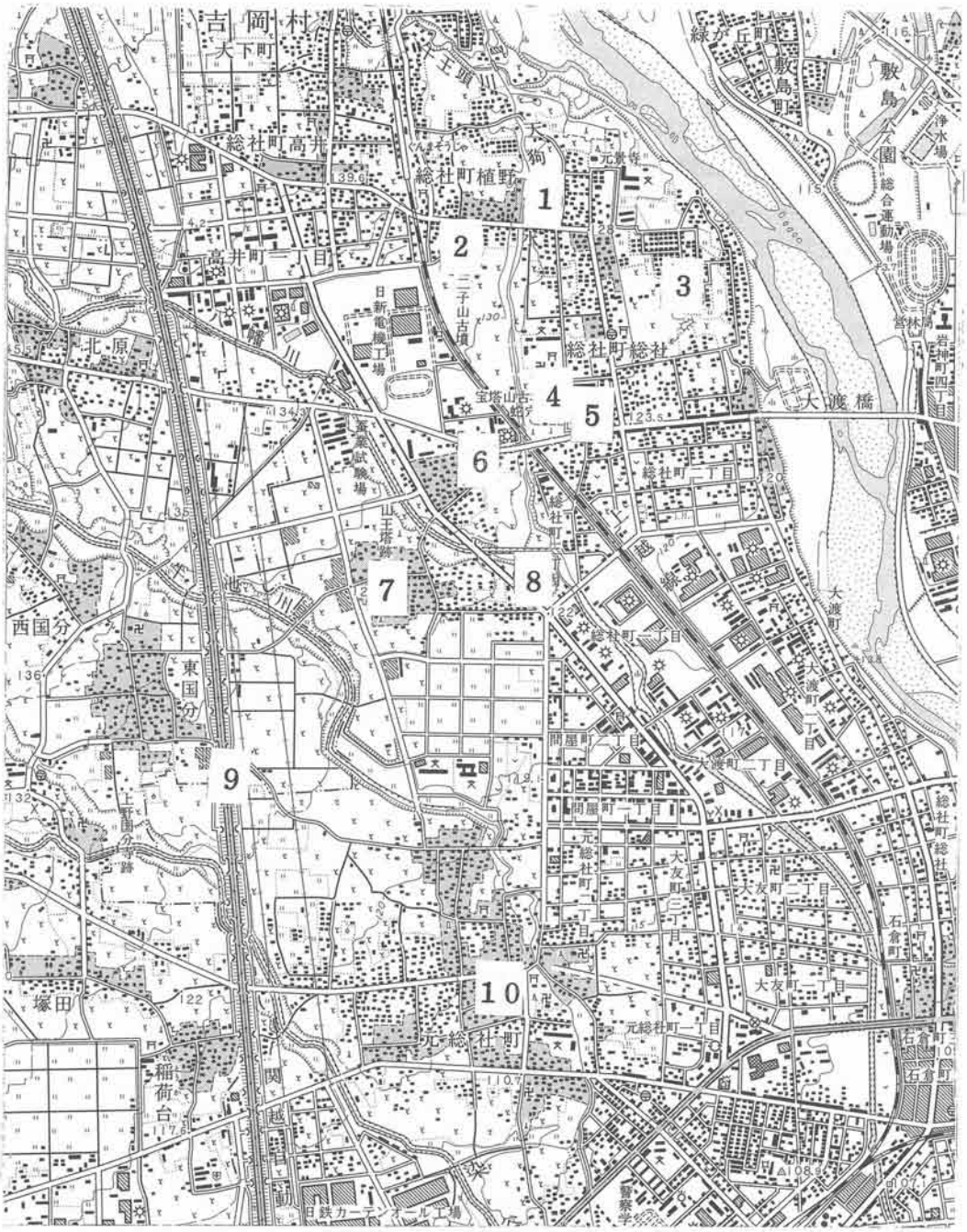
１．発掘調査の経過

前橋市は昭和２０年８月５日の大空襲によって市街地の８割を焼失する被害を受けたが、昭和２１年１０月には中心市街地約３００ｈａを戦災復興土地区画整理事業に着手、群馬県と前橋市が施工者になりいち早く復興に努めると共に、昭和２９年には隣接町村を合併し、元総社町、総社町などの利根川右岸の地域には、消費都市から生産都市への転換をはかるため都市計画決定を昭和３３年の新前橋区画整理事業に続いて、同３６年西部第１、同３７年には西部第２、西部第３（西部第３総社明神）土地区画整理事業の計画決定がされた。昭和５７年６月には前橋市都市計画事業元総社（西部第三明神）土地区画整理事業が実施に移され、県都前橋としてまた広域経済圏の拠点都市を目指して着実に整備されている。かつて７世紀の上野国の中心地上野国府を今、都市計画事業によって再構築をしている状況です。新都市計画法は昭和４３年（法律第１００号）で「都市の健全な発展と秩序ある整備を図り・・・・・」を目的に施行され、これを受けて、前橋市は宅地開発指導要項（前橋市告示第１０号）で開発行為に対する同意（都市計画法第３２条の規定）をするため、開発行為事業の行政指導に当たっている。市教育委員会では「開発行為の土木工事」と「文化財保護法（昭和２５年法律第２１４号）第５７条の２（土木工事等のための発掘に関する届出及び指示）」との調整と行政指導にあたっている。

稲荷山古墳が所在する前橋市総社町総社は総社古墳群として古代遺跡の集中していることで良く知られている地域である。旧群馬郡総社町総社に位置し二子山古墳を始めとして、蛇穴・宝塔山古墳でよく知られている地域でもある。稲荷山古墳については、昭和６３年４月地権者より宅地開発についての強い要望がなされ前橋市教育委員会としては極力古墳を保存する方針で臨んだが、協議の結果発掘調査の上記録保存する事となった。調査は前橋市埋蔵文化財発掘調査団が実施する事となった。

本遺跡では5m毎にｸﾞﾘｯﾄを設定し北西隅から東西をｱﾗﾋﾞｱ数字、南北をABCで表した。A-0ｸﾞﾘｯﾄの座標値はX=45825.000mY=-71010.000mとした。標高は遺跡内に132.00m基準を定め調査を進めた。

６３年６月２０日　発掘調査用機材準備、周辺住民に挨拶廻り。立木伐採、焼却、降雨
６月２９日　発掘調査機材及び作業員休憩所搬入、北東部１／４排除。
６月３０日　安全防護用フェンス設置。
７月　１日　円形の葺石、周辺より埴輪及び須恵器の破片が出土する。近藤義雄氏来跡
７月　６日　東京都教育委員会関係者７名来跡。
７月１２日　クレーン車により天井石移動する。
７月１３日　バックホウで表土剥ぎと大きな石の移動。
７月１４日　連日の降雨と工期からシート張り作業続行する。石室のほぼ全貌現れる。
７月１６日　鉄鏃、轡、白銅製金具等出土する。
７月１７日　石室展開図、石室床面敷石を実測。
７月２０日　東側トレンチを埋め戻し現地調査を終了する。　　調査日誌より抜粋



1：25,000　前　橋

500m　0　500　1000

第１図　周辺の遺跡

1．稲荷山古墳　2．二子山古墳　3．遠見山古墳　4．宝塔山古墳

5．蛇穴山古墳　6．村東遺跡　7．山王廃寺址　8．昌楽寺向遺跡

9．国分寺中間地域遺跡　10．国府推定地域

第２章 稲荷山古墳の立地環境と周辺遺跡

１．立地環境

本地区は榛名山東南麓斜面の末端にあたり、榛名山泥流域の標高129.7m～130.1mにある、北西方向から南東方向にかけて緩傾斜地をなし午王頭川、八幡川、牛池川が南東流し浸蝕により小規模な舌状台地を形成しその台地上に古墳が存在している。

現在の利根川は、前橋市街地の西側を南流しているが、この西岸は東岸とともに標高１３０ｍ前後の平坦な洪積台地、いわゆる「前橋台地」となっている。本古墳は西岸の谷壁から約５００ｍのところに位置している。

古墳時代の利根川の流路は、旧市街地の北半から赤城山西南麓の山麓線との間、幅約３kmの東南方向に走る底地帯を東南流していたのもと推定されているが、本墳の位置はその分岐点付近にあるもので、この距離は当時においてもさほど大きなちがいはなかったものと思われる。

２．周辺の遺跡

稲荷山古墳は前橋市総社町総社に所在する。総社町は江戸時代から明治２２年まで惣社町と書き、明治２２年から明治２９年の間西群馬郡総社町と呼ばれ、明治２９年植野村、高井村、総社町が合併して、群馬郡に所属し、昭和２９年前橋市の一部となった。

総社地区は、昭和３５年代前橋工業団地造成組合認可により、首都圏市街地開発区域の指定を受け、上越線沿線に１～３号の工業団地が造成された。産業道路沿いには多くの会社・商店が進出し、市内でも開発の波がいち早く押し寄せた地域である。上毛古墳綜覧では、１５基の古墳が掲載され、昭和３８年の群馬県の遺跡では１３基の古墳が収録され、さらに昭和４９年刊行の群馬県遺跡台帳Ｉ東毛編でも、１３基の古墳について記述されている。（№１０６．№１１２の稲荷山の記述が総社町第１２号墳とされている）

本遺跡周辺には、昭和２年国指定史跡の総社二子山古墳を始めとし、同１１年小字山王の石製鴟尾が国重要美術品に、同１９年に宝塔山古墳が国指定史跡に追加され、同２８年上野国山王廃寺塔心柱根巻石が国重要文化財に指定された。　さらに昭和４５年に蛇穴山古墳も国指定史跡にになり総社町古墳群はこの他に愛宕山古墳、遠見山古墳、大小路山古墳等、古代史の重要な遺跡の集中していることで早くから知られた地域である。（第１図参照）

王山古墳

墳丘は前方部の幅が後円部の径をやや上回る形態で、榛名山二ツ岳の火山灰層（ＦＡ６世紀初頭の噴出）の上に築造している。基壇と封土の二段に構築しており、それぞれ丁寧に葺石している。「積石塚」の様な構造をし、埴輪は墳頂の縁辺と基壇に配列されたとみられ、円筒埴輪を主に後円部では玉纏太刀、楯等の器財埴輪も認められた。

石室は上半を失い後円部のほぼ中央に奥壁がある。墳丘の主軸とは直交せず、やや後円部の後方に開いて封土の葺石の中程に開口している。長大な規模ではあるが玄室は奥行４．４ｍ、奥幅１．６ｍ、羨道の幅９０cm前後である。側壁は４０×３０cm程の河原石を小口積みにしており、羨道

部ではやや小ぶりである。玄室の入口には框石が据えられていて羨道から一段下がって入る構造になっている。横穴式石室受容当初の様相が伺える。一度円墳として完成した墳丘に前方部を取り付けて前方後円墳に改装したことが推定される。

総社二子山古墳

９０ｍ前後の主軸をほぼ東西に置いた二段築造の前方部は西を向いている。墳丘は同町元景寺の檀徒の墓地として長年にわたって利用された模様で、かなり変形している、墳丘の南側、くびれ部はいちじるしく抉りこまれており、後円部北側も削り取られて一見前方後方墳のようにも見える。現状で基底面における計測値は後円部径４４．９ｍ、前方部幅６１ｍ、くびれ部幅２２．８ｍであり、後円部の高さ７．５ｍ、前方部の高さ８ｍ、基檀は高さ２．５ｍ幅は５ｍ前後に認められる。この基檀上に前方部、後円部ともに横穴式両袖型石室を造りこんでいる。　後円部石室が６世紀後半、前方部石室は６世紀末とされている。二段築造・葺石を施し埴輪の使用が推定される。奥行７ｍ、幅３．５ｍ、軽石質の角閃石安山岩の削り石を用いて壁体を構築しており一部に切り組手法がみられ、天井石は崩落しているが巨石３石が現存している。
墳丘の周囲を前方部方向にむかってひろがる幅２０ｍ前後のやや周囲より低い畑地がとり囲んでおり周堀の囲繞が予測される。また墳丘には転石が多量に認められて葺石の施設が予想され、埴輪片の散布からは埴輪の配列が考えられる。

愛宕山古墳

墳丘の現状から二段築造の方形と考えられ埴輪片は見あたらない。未調査であるので詳細不明、石室は県下最大級の観音山古墳、観音塚古墳に匹敵する規模である。壁体は輝石安山岩の大ぶりの自然石を乱石積にしているが、一部に角閃石安山岩の削り石を極く補助的に併用している。
玄室の奥には凝灰岩製の家形石棺を安置している。７世紀中葉の構築と考えられている。

宝塔山古墳

一辺の長さ約５５ｍ、墳丘高１１ｍの規模を誇る方墳である。この規模は方墳としては全国的に見ても大きい。墳丘は二段築造で葺石があり南側に約２０ｍ幅の周堀の痕跡がみられる。石室の構築にはおそらく寺院の建立に用いられたとみられる高度の石工技術が駆使されている。版築の基壇上に構築されており、羨道・前室・玄室からなる構成でそれぞれの入口には羨門、前門、玄門を設け羨門前に平面台形の前庭がある。玄室のプランはほぼ正方形で脚部に格狭間をくり込んだ精美な家形石棺を安置する。複式の截石切組積みの横穴式両袖型石室の技法で隙間なく積み上げられている。石室の壁は精巧に加工した切石を使用して積み上げ、随所に切組積の手法もみられる。特に天井石及び玄室入口の玄門の加工はみごとである。　石室の規模は全長１２．４ｍ、玄室長３．３ｍ、同奥幅３．０２ｍである。玄室には家形石棺がある。その底部は四辺とも各狭間の形にくり抜かれ、古墳への仏教文化の影響を物語っている。７世紀後半の終末期古墳の典型的な作例であり、従来山王廃寺の根巻石、石製鴟尾、塔心礎との技法上の対比がなされている。

蛇穴山古墳

一辺の長さ約４０ｍの方墳である。　墳丘は２段築造で葺石があり石室は截石切組積みの横穴式両袖型石室で、一部に敷石が残る。巨大な輝石安山岩の板石を用いている。左右の側壁の各々一枚と玄室の冠材、左右の袖壁の七枚で構成している。プランはほぼ正方形でそれぞれの壁面には、面揃えが施され、壁面には漆喰の塗布の痕跡も認められる。羨道を欠き玄門と玄室からなる特殊な形をとっている。玄門の前には羨道の痕跡ともみられる構造とハの字形にひらく前庭がある。天井石、奥壁などの縁はＬ字形に切り込んで壁の石と組み合わせている。精巧な細工をほどこした玄門とともに、当時の石材加工技術の優秀さを物語っている。石室の規模は玄室長（西）３ｍ、同幅２．６ｍ、同高さ１．８ｍである。隣接する宝塔山古墳とともに県内古墳の最終末期に造られたもので８世紀初頭の頃に位置づけられよう。

山王廃寺・塔心礎

山王廃寺跡は総社町総社字昌楽寺廻りにある。宝塔山古墳と山王廃寺塔心柱根巻石の石材加工の技法の類似が指摘される。この心礎は、日技神社境内（総社町総社字昌楽寺廻り村北２４０８番地）にある。この境内は周囲の地よりも南及び東の道路側で約６０ｃｍ高く、北及び西の畑地よりもやや上がっており基壇の一部と考えられる。心礎はその面から約６０ｃｍ低く道路面と等しい。大正年間偶然発見された。心礎の上面には舎利孔があり環溝東西南北に放射状溝が掘られている。舎利孔は２段に掘られ、孔底は塊底型になっており、環溝及び放射状溝はＶ字型底に造られている。

山王廃寺塔心柱根巻石

七片の石は全体として蓮の花を表し中心の径は約１ｍで山王廃寺の主要な建物の柱の基部を飾ったものと思われる。輝石安山岩の堅硬な材質の石を加工したもので宝塔山古墳の石棺脚部の格狭間にあらわれている工法に相応するものとされている。

緑釉水注・わん・皿および銅わん

山王廃寺跡からセットで出土したものでうわ薬をかけたこのような器は誰もが持ってたものではなく、密教に関する仏教行事に用いられたとの見方が有力です。

石製鴟尾

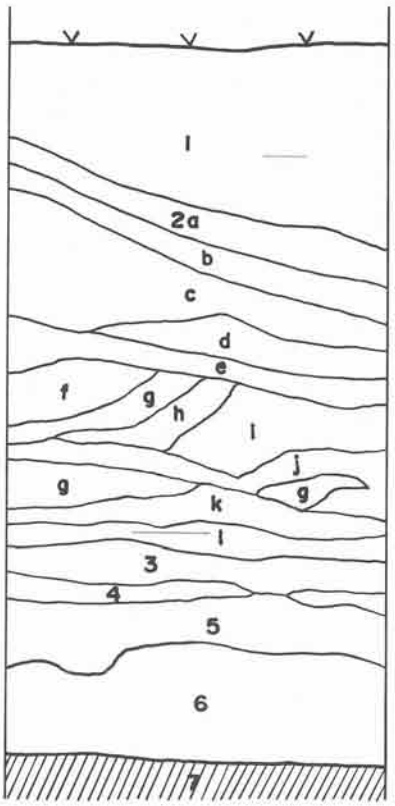
鴟尾とは火に合うと水をふくといわれる架空の動物で防火のまじないとして屋根の大棟の東西両端に置かれたものである。石製のものは珍しく、重さは約１トンある。この尾は日枝神社の境内と付近の都丸民治氏方に各１体存在し、１対と成るものとみられている。材質は輝石安山岩である。

第３章　調査の概要

１．基本土層

本遺跡では第１層から第７層迄の標準土層を確認した。

第１層　表土層
第２層　墳丘封土
第２層ａ　軟らかい黒色土層
　　ｂ　粒状のソフトロームの黄褐色土層
　　ｃ　ＦＡを含む黄褐色土層
　　ｄ　浅間のＣ軽石を含む黒褐色土層
　　ｅ　ＦＡを含む黄褐色土層
　　ｆ　Ｃ軽石２０～３０％含む黒褐色土層
　　ｇ　〃７０～８０％多量に含む黒色土層
　　ｈ　ＦＡのブロック、明るい黄褐色土層
　　ｉ　浅間のＣ軽石１０～２０％を含むｇ
　　より明るい黒褐色土層
　　ｊ　〃　極僅かしか含まない褐色土層
　　ｋ　〃　含む黒褐色土層
　　ｌ　１㎜位の軽石を含む第３層より僅か
　　暗い褐色土層
第３層　榛名山二ツ岳火山灰層(FAF)褐色土層
第４層　榛名山二ツ岳火山灰層(FA)黄褐色土層
第５層　Ｃ軽石を８０～９０％含む黒色土層
第６層　浅間Ｃ軽石を僅か含む黒色土層
第７層　ソフトロームの褐色土層



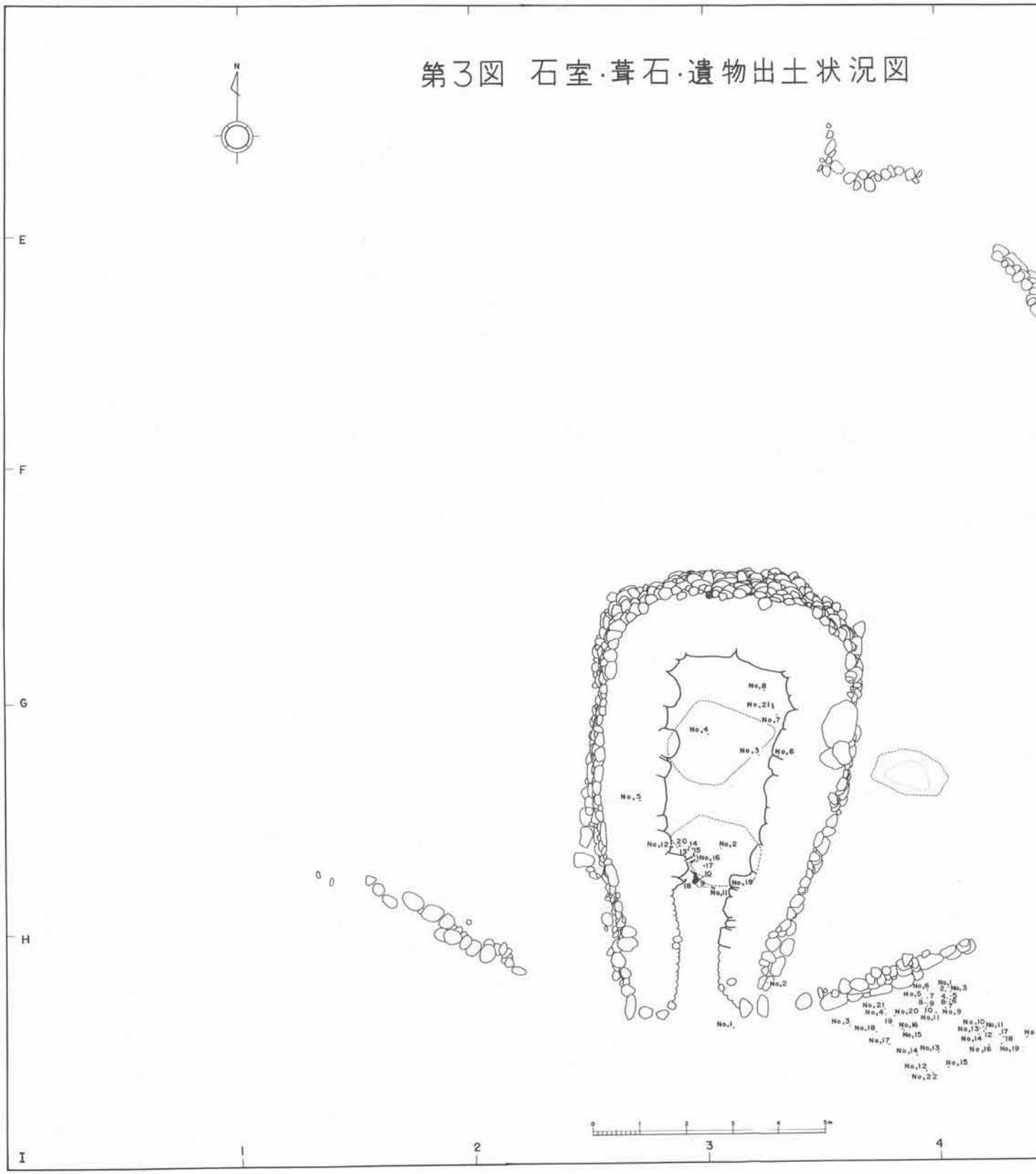
２．本古墳に関する記述

本古墳については、上毛古墳綜覧（昭和１０年の調査）に、円墳として総社町第１２号稲荷山古墳、　軸長１１０尺と記載され、昭和４９年発行の群馬県遺跡台帳Ⅰ（東毛編）で、「№１１２墳丘は大部分破壊され横穴式石室の石材も一部露出している。頂上部には穂積稲荷が祀られ周囲には庚申塔が３０基ほど見られる。」と報告されている。

また山崎一氏の群馬県古城塁址の研究上巻付図３６５総社城の図の中に天狗岩堰の堀の所に稲荷山古墳の位置に＋３の円形と堀の北側に土塁として＋２．５が記されている。地元の人の話では西側に墳丘が続いていたとの話もあったが今は確認の方法もない。稲荷山古墳基檀の北側は秋元氏の時代に築かれた総社城の堀になっていた。

当古墳は江戸時代中期（天文元年１７３６年）の庚申塔があり、地権者の穂積氏の話に享保時代（１７１６～１７３６年）から稲荷神社として利用されている事が伝えられている。調査前は墳丘全体が、篠竹杉梅等の木立で覆われ踏査も容易ではなかった。立木を苅払った状況（図版５）

第3図 石室·葺石·遺物出土状況図



では天井石が露出し石室の破壊が著しいことを伺わせた。地元の中川一郎氏は大正３年に掘った時錆びた鉄が束になって出土したのを確認し、穂積家にもその時掘り出されたと思われる太刀が昭和４０年代の火災に逢うまで所持されていたとの事であるが今は残っていない。

３　墳丘の調査

２トレンチ（Ｆ－５グリット付近）において確認した状況では、墳丘下の自然堆積層は１５ｃｍの浅間Ｃ軽石黄褐色土層と榛名山二ツ岳ＦＡ層が不整合に堆積し、その上に５～６ｃｍのＦＡの二次堆積層がみられる。この３層の直上が本古墳の構築面と考えられる。浅間Ｃ軽石を多量に含む黒色土層が逆転して盛り上げられている。

現状で基底面における計測値は石室を通る南北方向の幅３３．０ｍ～東西方向の幅２１．４ｍ、基壇の高さは３．１ｍ～３．５ｍが計測された。この基壇上に横穴式両袖型石室を造り込んでいる。墳丘の東側は道路であり南北方向幅５ｍの道路が通り北側には総社城の外堀が天狗岩用水におよんでおり、当古墳の墳形及び周堀を確認するには現在住宅となっている南側と西側の調査の出来る機会を待たねばならないであろう。調査前の踏査で埴輪片が数点確認されていた。（第７図）

４　石室の調査（第６図参照）

羨道部を南に向け主軸をＮ－９°－Ｅにとる古墳であり、石室天井部まで殆ど削平され僅かに奥壁の裏込部に封土を残すのみであった。奥壁を中心として２本のトレンチを設定し墳丘の形状確認を行った。奥壁の中央が円形葺石の中心となる。

５　石室の構築状態

両袖型横穴式石室の奥壁の中央が葺石の中心になっている事から少なくとも封土は円形を呈していたと考えられる。石室内より寛永通寶が出土し、また大正時代にも発掘され、又、石室左壁中央付近から火葬骨が出土した事から江戸時代に何回か盗掘され、また大正時代（大正３年）にも盗掘されたことが地元民により確認されている。天井石は２石残存したが築造時の位置を示すものとは考えられない。

６　石室壁体（第４図参照）

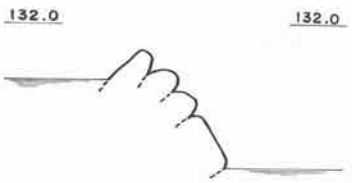
石室及び裏込石に榛名山二ツ岳形成時の爆発により生じた角閃石安山岩を所々に使用している。Ｇ－３グリットに所在した石は２００×１４５cm（約6.５ｔ）で、石室の天井石として使用されていたものと考えられる。また羨道部付近の石（２００×１６０cm)も天井石として使用されていた可能性が考えられる。さらに庚申青面金剛とその台石も本来天井石として使用されていた可能性も考えられる。残存する壁面は根石を含め左右ともに２段、奥壁も左側２段右側は根石のみ残存していた。両壁は横４３～１１７cm、縦３８～９８cmとやや横長の自然石を使用している。石材の平らな面を壁内面として使用している。左壁中央部石材は縦長に使用されたものが３石見られた右壁中央では１石見られる。奥壁は１３６×７０cm，１１４×７４cm，９２×７４cmの３石からなり左右の壁石より大きな自然石を横長に使用している。

第4図

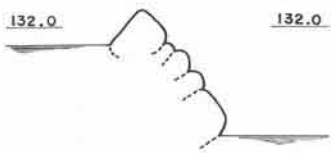
羨道部閉塞状況図

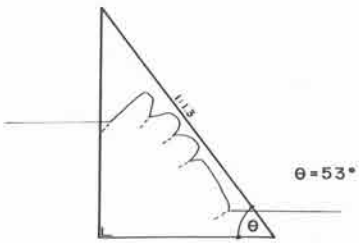
第5図

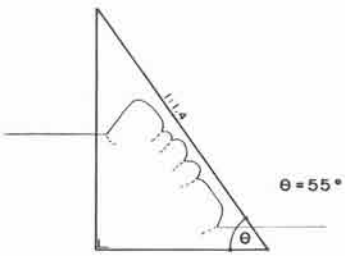
葺石南北断面図



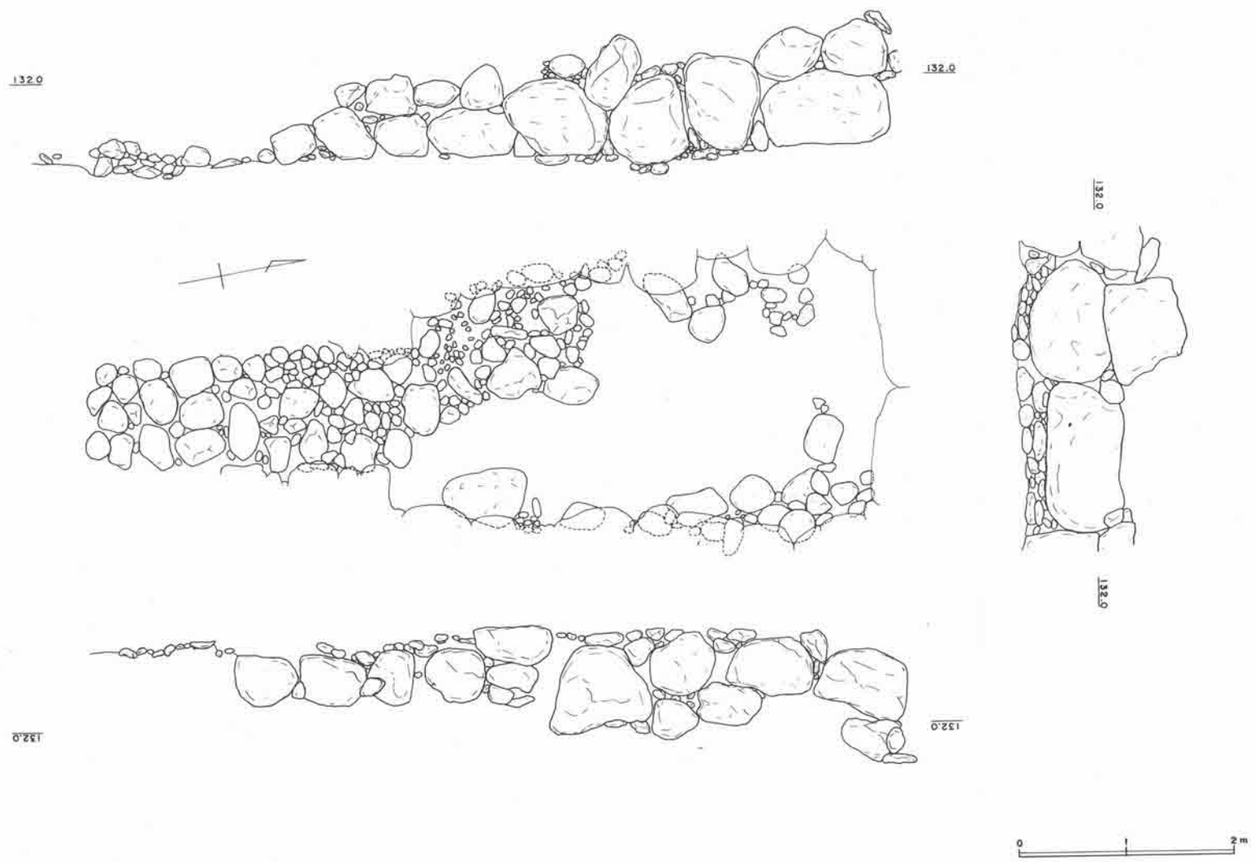
葺石北東断面図





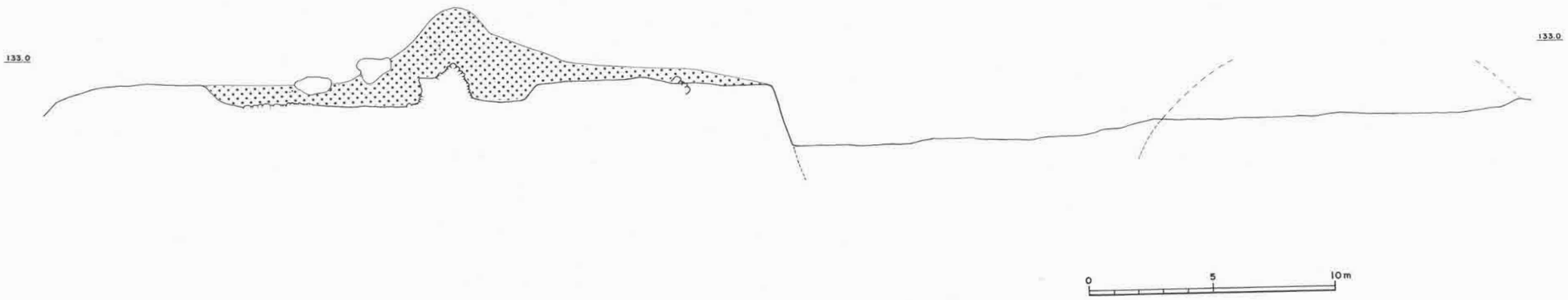


第6図　石室展開図

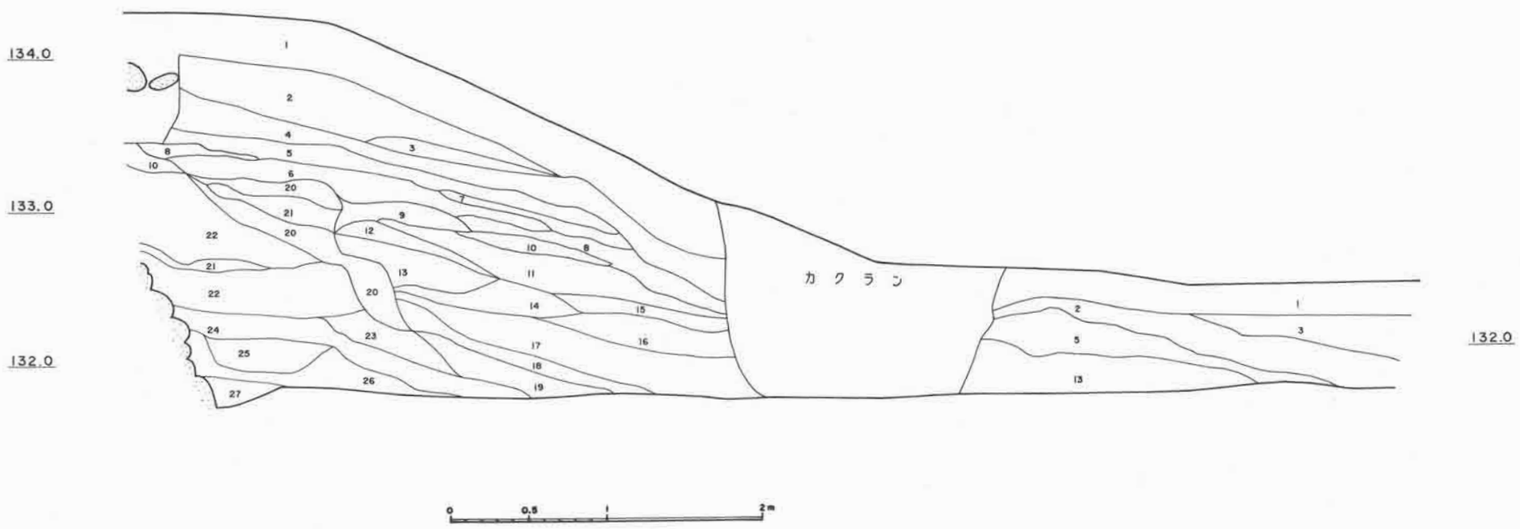


第7図 墳丘縦断図

墳丘縦断図



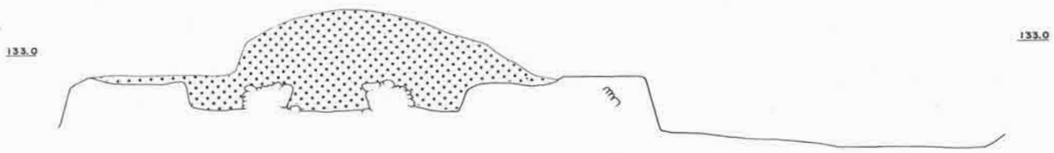
土層断面図(S－N)



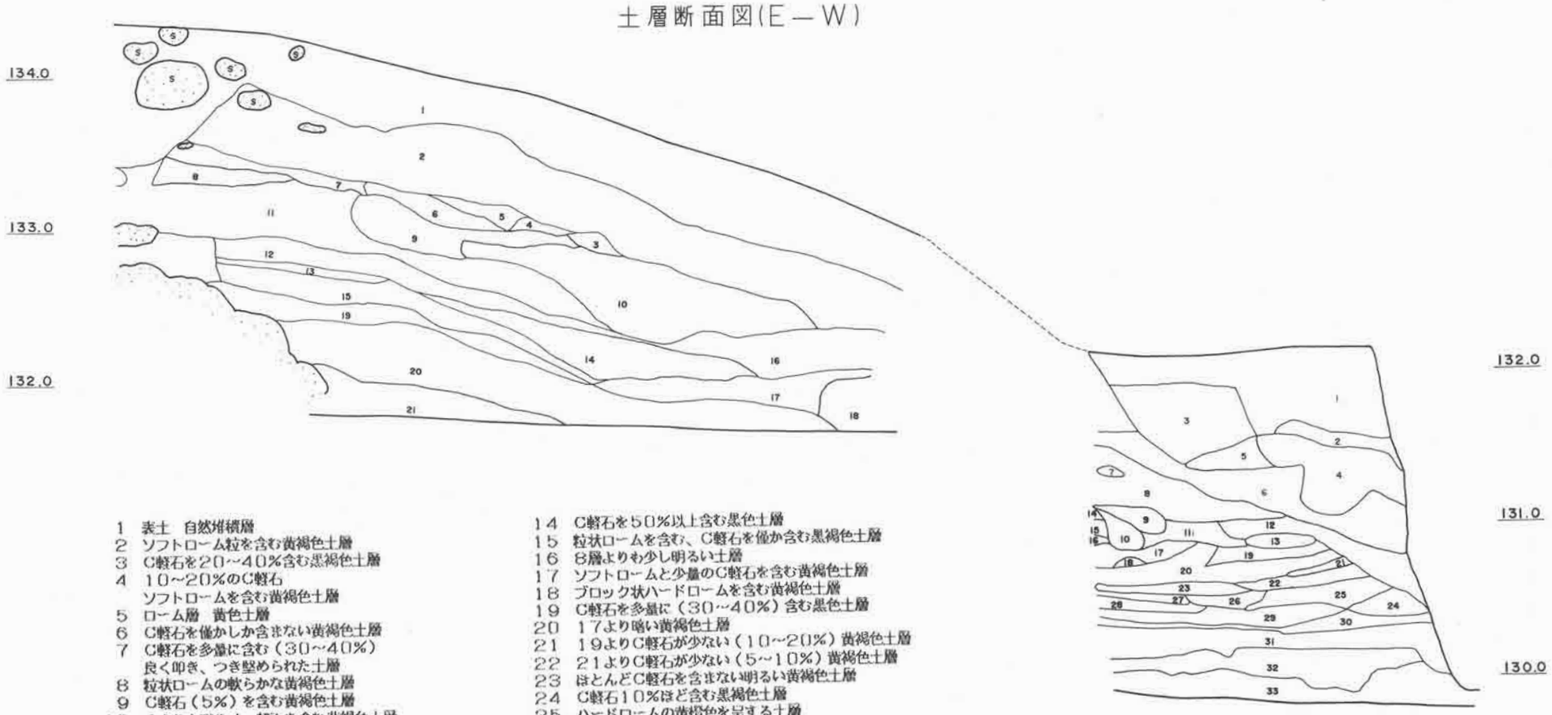
1 表土自然堆積層
2 ソフトロームを含む黄褐色土層
3 C軽石を含む（5~10%）暗褐色土層
4 1よりソフトロームを多く含む黄褐色土層
5 ソフトロームのブロックを含む黄褐色土層
6 C軽石（5~10%）を含む黄褐色土層
7 C軽石20~30%黒褐色土層
8 ソフトローム層
9 ソフトローム層 軽石を僅か含む暗褐色土層
10 シルト層 薄ピンクの粘土層
11 ブロック状ロームを含む黄褐色土層
12 ソフトロームと黒色土の混土層
13 ソフトローム 黄褐色土層
14 ブロック状ローム層
15 軽石（5~10%）含む黒褐色土層
16 ソフトロームの黄褐色土層
17 ソフトロームを僅か含む黄褐色土層
18 ソフトローム層17層より軽石を僅か含む
19 ソフトローム層18層より明るい黄褐色
20 黄色のローム層
21 ブロック状ロームを多量に含む黄褐色土層
22 黄褐色土層
23 C軽石を含む（10~20%）黒褐色土層
24 ソフトロームを含む黒褐色土層
（軽石は殆ど見られない）
25 C軽石を含む（30~40%）黒色土層
26 ハードロームを含む褐色土層
27 26より暗い褐色土層

第8図 墳丘横断図

墳丘横断図



土層断面図(E－W)



1 表土 自然堆積層
2 ソフトローム粒を含む黄褐色土層
3 C軽石を20~40%含む黒褐色土層
4 10~20%のC軽石
ソフトロームを含む黄褐色土層
5 ローム層 黄色土層
6 C軽石を僅かしか含まない黄褐色土層
7 C軽石を多量に含む（30~40%）
良く叩き、つき堅められた土層
8 粒状ロームの軟らかな黄褐色土層
9 C軽石（5%）を含む黄褐色土層
10 9よりも明るく、軽石を含む黄褐色土層
11 9に同じ
12 1に近い、ごく僅か軽石を含む土層
13 シルト層薄、ピンクの粘土層
14 C軽石を50%以上含む黒色土層
15 粒状ロームを含む、C軽石を僅か含む黒褐色土層
16 8層よりも少し明るい土層
17 ソフトロームと少量のC軽石を含む黄褐色土層
18 ブロック状ハードロームを含む黄褐色土層
19 C軽石を多量に（30~40%）含む黒色土層
20 17より暗い黄褐色土層
21 19よりC軽石が少ない（10~20%）黄褐色土層
22 21よりC軽石が少ない（5~10%）黄褐色土層
23 ほとんどC軽石を含まない明るい黄褐色土層
24 C軽石10%ほど含む黒褐色土層
25 ハードロームの黄橙色を呈する土層
26 C軽石10%とローム粒を含む黄褐色土層

1 表土 黒褐色土層
2 軟らかい黒褐色土層
3 近世墓坑 黒褐色土層
4 近世墓坑 黒褐色土層、3層よりやや締まっている。
5 軽石を（5%以下）含む褐色土層
6 黄褐色土層（粒状のソフトロームからなる層）
墳丘表面と考えられる。
7 FAを含むブロック黄褐色土層 10層にほぼ同じ。
8 粒状のソフトロームを含む黄褐色土層
9 黄褐色 FAのブロック 暗い。
10 黄褐色 FAのブロック 明るい。
11 21層がブロック状に含まれる黒褐色土層
12 褐色土層 C軽石はごく僅かしか含まれない。
13 10層に同じ。
14 C軽石20~30%含む黒褐色土層
15 17層と同じ。
16 17層よりさらに軽石の少ない褐色土層
17 C軽石10~20% 20層より明るい黒褐色土層
18 9層に同じ FAと黒褐色土の混土層
19 20層より軽石が少なく
13層よりFAも少ない黒褐色土層
20 C軽石を多量に含む（70~80%）黒色土層
21 FAと黒褐色土層
22 25層より軽石の少ない黒褐色土層
23 C軽石を含む黒褐色土層
24 29層にほぼ同じ。
25 26層よりC軽石を多く含む黒褐色土層
26 27層よりFAを多く含む褐色土層
27 C軽石を含む黒褐色土層
28 褐色土層 1mm位の軽石を含む 29層より僅か暗い。
29 褐色土層 榛名山二ツ岳火山灰二次堆積層
30 FA層 黄褐色火山灰層（2~3mmの軽石を含む）
31 黒色土層（C軽石80~90%含む）
32 黒色土層（C軽石を僅か含む）
33 ソフトローム層（2~3mmの軽石を含む）

7　石室裏込

内部主体を包み込む如く厚い裏込めがなされ、その外周はていねいに石積みして崩れを防いでいる。裏込め外周プランは卵型を呈し奥壁側で弧を描き両壁側では石室壁面より１４５～２４２cmの厚さで壁面に平行し、羨道部入口で開きぎみに羨道と裏込石と葺石が接し長楕円形を呈する。残存高は奥壁側で１４５cm余りで根石部分は径２４×４５cmの自然石を使用している。

稲荷山古墳計測値表　　表－１

				単位　cm	唐尺30cm	高麗尺３５.０cm
墳丘	基檀	残存全長	南北	３，３００～３，１２０	１１０～１０４	９４.28～８９.14
		〃	東西	２，１４０～１，８５０	７１.３～６１.６	６１.14～５２.85
		〃	高さ	３３０	１１	９．４３
	封土	直　径		１９６０	６５．３	５６．０
		高　さ		２５０	８．３	７．１４
		主軸方向		N－９°－E		
石室	全長		左	７４８	２４．９３	２１．３７
			右	７４０	２４．６	２１．１４
	玄室	長さ	左	４３２	１４．４	１２．３４
			右	４４２	１４．７３	１２．６３
		幅	奥	２２３	７．４３	６．３７
			前	１８１	６．０３	５．１７
	奥壁高		左	１６０	５．３	４．５７
			右	８５	２．８３	２．４３
	羨道	長さ	左	３１５	１０．５	９．０
			右	２８５	９．５	８．１４
		幅	奥	９５	３．１６	２．７１
			前	８０	２．６	２．２９
葺石勾配		北東		５５°		
		南東		５３°		

8　封土

基本土層で示したように本古墳の基本的な土層は７層に分けられ、第１層が表土、第２層が墳丘構築の時に盛り上げられた封土である。第３層は榛名山二ッ岳火山灰層第４層は黄褐色土層（ＦＡ）第５層浅間のＣ軽石層第６層はＣ軽石を僅か含む黒色土層第７層でソフトローム層に達し地山を成すものと考えられる。第２層の封土は更に６層に分けられる。層状に積み上げ有る程度盛っては固めたものと思われる。その各層の中にはソフトローム層、浅間のＣ軽石を含む黒色土層、二ッ岳火山灰層が順に積み込まれている。自然堆積の逆順位に積み込まれていることが確認

された。この繰り返しが6層積み上げられている。

9　葺石

石室の北東部に崩壊を免れた５５°の勾配を持つ葺石が確認された。又石室の南東部で４段の石組が確認され、その勾配は５３°であった基檀部の葺石は不明である。（第５図参照）

第４章　出土遺物

今回の調査で出土した遺物の内原形をとどめたものは少ない。大半が破片であった。その為副装品や埴輪は復元不可能なものが多く、出土量に比して復元出来たものは極めて少ない。

埴輪の破片	４０５点	縄文土器片	６２点	菊皿	３点
須恵器の破片	１６３点	石斧	１点	皿（草花文）	１点
土師器の破片	１３９点	砥石	２点	石臼	１点
馬具	１６点	銅銭	３０点	スラグ	５点
鉄鏃	７点	庚申塔・青面	６７基	土製円盤	３点
金銅製飾金具	１点	（熊谷稲荷に移築）		近世の鏡	１点
その他の鉄製品	１２点	その他　近・現代の遺物		パン箱７箱	

墳丘・前庭出土遺物

北側トレンチ付近では転石が多数認められ葺石が崩れたものと思われる。この付近から埴輪片と須恵器大型甕の破片が多量に出土している。南東側の攪乱孔付近にも多量の埴輪片と土師器片が出土した。人物埴輪片もこの位置からの出土である。

埴輪

９－１は残存高１２．８㎝形象部の広がりが２９．０㎝以上あり、胴部は２０．０㎝で外面斜方向（１．８㎝に８本）内面横方向（１．６㎝に７本）の刷毛目と円筒部では指撫でが見られる。胎土は砂粒を含み粗雑な作りの形象埴輪の円筒部と形象部の境と考えられる。

９－２残存高８．５㎝幅８．９㎝目から頸部迄の人物埴輪の破片で顔と頸部の接合痕明瞭、焼成は良好で硬い、暗赤褐色、内外面縦の刷毛目。（第３図　Ｈ－３グリット№２１）

９－３直径３．７㎝の残存幅６．５㎝の砂粒を僅か含み焼成は良好、図の左側は接合部のとびだし、褐色、人物埴輪の腕の部分刷毛目は６本単位で幅が１．３㎝である。

９－４残存高１６．１㎝突帯部の径１５．９㎝から胴部径１６．１㎝赤橙色で焼成は普通、砂粒を含む、内外面とも縦方向刷毛目で柔らかな表現である。突帯の上下はよく撫でられている。朝顔形埴輪の胴からくびれ部と思われる。（墳丘北西部）

９－５残存高１５．０㎝底径１２．８㎝第１突帯の手前で１４．０㎝の径を持ち外面縦方向の刷毛目が見られ、内面も縦方向刷毛目後部分的に撫で消されている。基底部で少し締まり第１突帯の手前で欠損する円筒埴輪の基底部と思われる。（墳丘南部）

９－６残存高１４．３㎝底径１３．４㎝胴部径１２．６㎝、僅か砂粒を含み焼成は良好で暗赤褐色を呈し外面縦方向刷毛目内面縦方向の指撫、円筒埴輪の基底部。（第３図　Ｈ－４グリット№２

・3・12）

9－7残存高15.8㎝口径23.0㎝突帯部径19.8㎝透孔で17.0㎝透孔の径4.5㎝の楕円形を呈す。焼成は良好、褐色、外面は縦方向、内面は口縁付近が斜め方向胴部縦方向の刷毛目、透孔右側にヘラ痕がみられる。円筒埴輪の口縁～胴部。（墳丘北西部　7片接合）

11－6は動物埴輪、馬の尻繋付近の破片と思われる。残存高10.4㎝、厚さ0.5㎝、帯状の粘土の貼り付けがあり、剥がれた部分ではその下に縦横の刷毛目が施されている。同様の破片が3点ほど出土しているが接合は出来ない。（第3図　G－4グリットNo.1）

刷毛目6本	幅1.3㎝	No.7	0.2166	刷毛目8本	幅1.8㎝	No.3	0.2250
	1.3	26	0.2166		2.0	5	0.2500
	1.4	6	0.2333	9本	1.3	18	0.1444
	1.6	7	0.2666		1.4	2	0.1555
	1.7	13	0.2833		1.8	3	0.2000
7本	1.0	19	0.1428		1.9	11	0.2111
	1.7	1	0.2428		2.0	4	0.2222
	1.9	5	0.2714	10本	1.8	2	0.1800
8本	1.4	8	0.1750		1.9	2	0.1900
	1.5	1	0.1875	12本	3.0	21	0.2500

本古墳に伴う円筒埴輪を（第9図1～7）の計測値から総括して見ると、2本の突帯を持ち、突帯と突帯の間は8.5㎝から16.0㎝で透孔を持ち口縁部の高さ23.0㎝基底部高さ14.3㎝と15.0㎝が計測された。完形品が無いので数値上から復元すると、高さの最大値39.5㎝最小値が32.6㎝の円筒埴輪が想定される。口縁部から底部にかけて直線的にすぼまる形態的変化、外面調整は一次の縦刷毛目のみ、内面調整は縦指撫でを主体とし、巻き上げ底を残すといった製作技法の粗雑化、胴部の突帯は一段で小さく円筒埴輪の質的変化が見られる。このように本遺跡が後期古墳の特色である円筒埴輪の小型化、粗雑化が進行したことが埴輪からも伺われる。

16－1高坏の脚柱部残存高7.4㎝外面ヘラ削りヘラナデ、内面は輪積痕明瞭で黒色処理されている。坏部・裾部とも不明。（墳丘南部）

16－2坏1／2残　口径13.4㎝器高3.3㎝砂粒を含み赤橙色、体部と口縁部の境に稜を持ち内湾しながら外反する。底部箆削り、内面に布目。（第3図　H－3グリットNo.4・10　H－4グリットNo.9）

16－3坏口径13.2㎝器高3.4㎝砂粒を含み、褐色、一部煤付着、口縁部内外面回転ナデ。体部と口縁の境に稜を有し底部はヘラ削り。（第3図　H－3グリットNo.3・4・9・11）

16－4小型壺、口径（9.6㎝）細砂粒混入、焼成は良、褐色、全体に煤付着、口縁部は内外面ナデ胴部ヘラ削り。

16－5坏、破片であるので推定口径14.6㎝高さ3.4㎝黒褐色、細砂を含み底部はヘラ削り、

２段の稜を有し、内外面回転ナデ全体に煤付着、口～底１／８残。（第３図　H-3ｸﾞﾘｯﾄ№6）

１６－６須恵器高坏の脚部（推）底径は（１２．４㎝）残存高４．６㎝砂粒を含み堅緻、灰色、ゆるい勾配で裾部で開く透かし窓が図の両端に見られ内外面丁寧なナデ。（墳丘北東部）

１６－７須恵器高台付埦　底径７．４㎝残存高２．４㎝微砂粒を含み堅緻、灰白色、回転糸切りの付高台、内外面丁寧なナデ。

１６－８埦　推定口径１３．６㎝底径６．２㎝器高４．２㎝多量に砂粒を含み焼成やや軟、褐色、表面黒色塗採、体部は内湾し口縁部は外反する。内外面丁寧なナデ、回転糸切り痕。

１６－９高台付埦　底径６．８㎝残存高１．２㎝、砂粒、焼成堅緻、内外面ナデ、黒色塗採、回転糸切り痕。

１６－１０高台付埦　底径６．８㎝残存高１．６㎝、砂粒、堅緻、内外面回転ナデ、糸切り痕。（玄室内より出土）

１６－１１埦　口径１２．２㎝残存高３．３㎝、細砂粒、焼成は普通、灰褐色、表面は煤付着、体部は僅か内湾し口縁部はゆるく外反する。内外面ナデ。（玄室内より出土）

１６－１２高台付埦　底径８．２㎝残存高３．１㎝細砂粒、焼成は普通、灰褐色、内外面丁寧なナデ、内面「Ｖ」字状、外面「万」字墨書あり。

１６－１３長頸壺口縁部　口径９．８㎝残存高３．１㎝多量の砂粒、堅緻、灰褐色、表面は黒灰色の釉が見られる。頸部は外傾し口唇部で内傾する。（玄室内より出土）

１６－１４長頸壺口縁部　口径８．８㎝残存高４．４㎝多量の砂粒、堅緻、灰色、表面は褐灰の釉がみられる。下部に２本の沈線、直線的に立ち上がり口唇部で内傾する。（玄室内より出土）

１６－１５埦　口径７．０㎝残存高４．６㎝細砂粒、堅緻、灰色、長い口縁と体部の境に沈線あり、内外面丁寧なナデ。

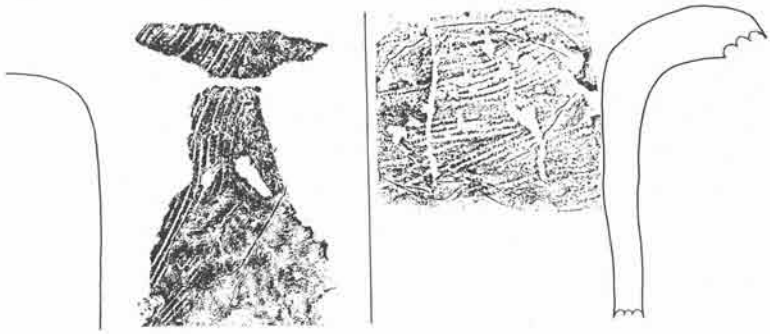
１６－１６高台付埦　底径６．４㎝残存高２．０㎝微砂粒を含み堅緻、灰白色、回転糸切り、外面は丁寧なナデ、高台の内側は指押え痕明瞭。体部にナデ後指を離した痕あり。

１６－１７坏蓋の一部　口径１５．０㎝残存高２．１㎝微砂粒を含み堅緻、外面灰釉で灰褐色、内面灰色、その中間は紫褐色を呈す。内外面丁寧なナデ。長い返りが見られる。（墳丘南部）

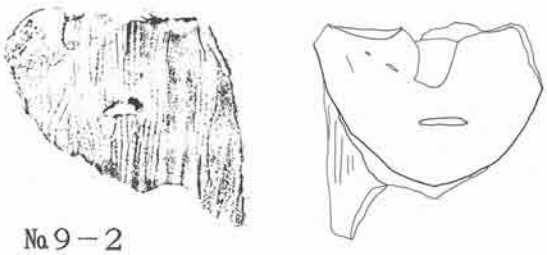
その他の須恵器

石室の北側と南東部付近からまとまって出土した。何れも破片であり個体数は不明。埴輪との関連が注目される。石室内からも大甕の破片が出土している。外面は平行叩き目、内面は同心円叩き目が施文されている。口縁部付近に波状文を有する須恵器が出土している。その波状文の幅を本数で割ったものをセンチメートルで表すと、１５－№８　０．０９３３北西部　１５－７　０．１０７１　１５－５　０．１５００　１５－２，３－０．１８００（Ｈ－１グリット）　１５－６　外面０．１４４４　内面－０．１８００　１５－９　０．２１４２（Ｆ－４グリット）となっている。

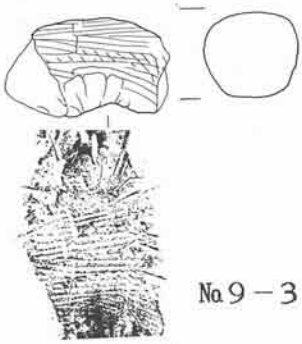
第9図 埴輪実測図



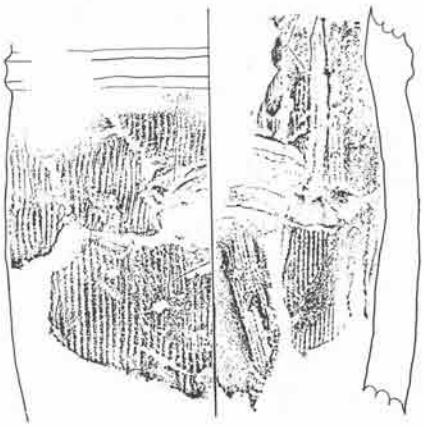
No.9－1



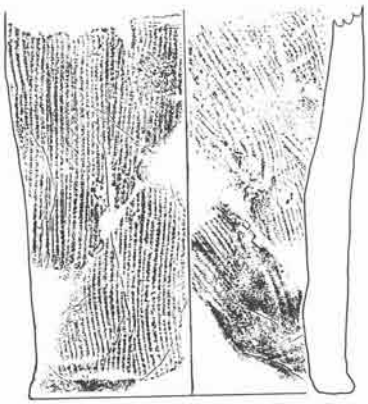
No.9－2



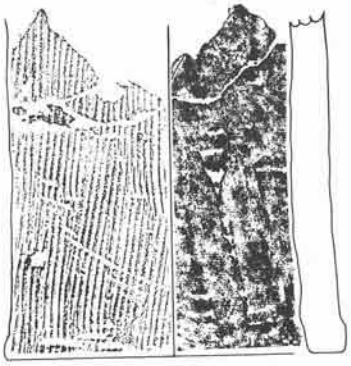
No.9－3



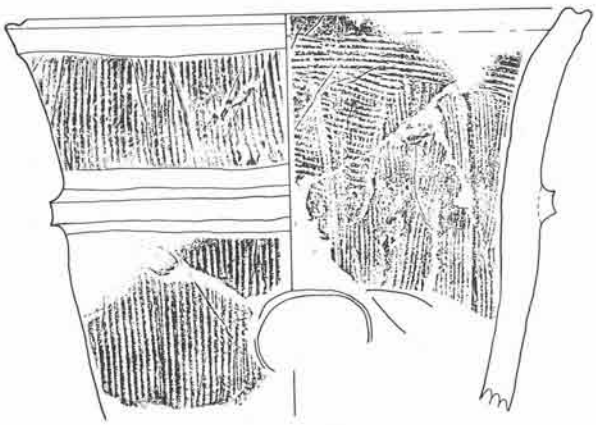
No.9－4



No.9－5

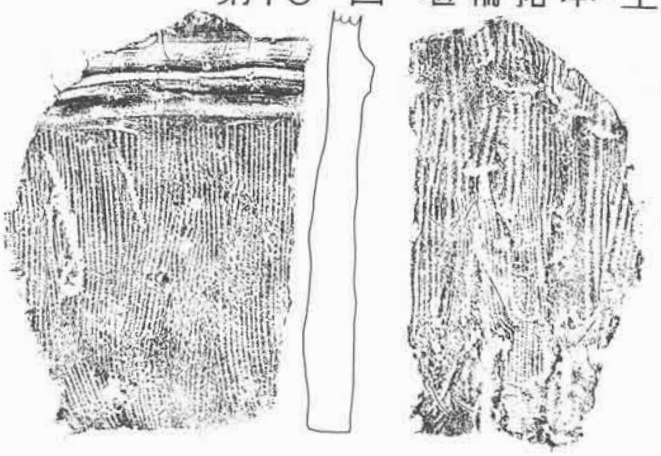


No.9－6

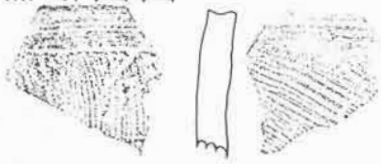


No.9－7

第10 図 埴輪拓本・土器断面図

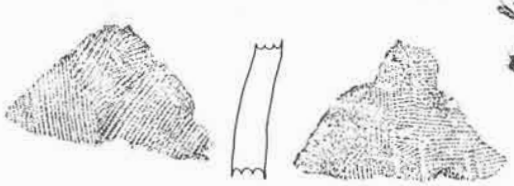


No.10－1

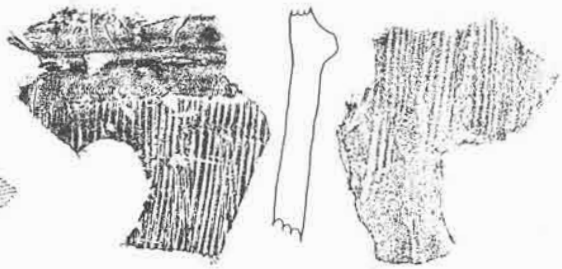


No.10－2

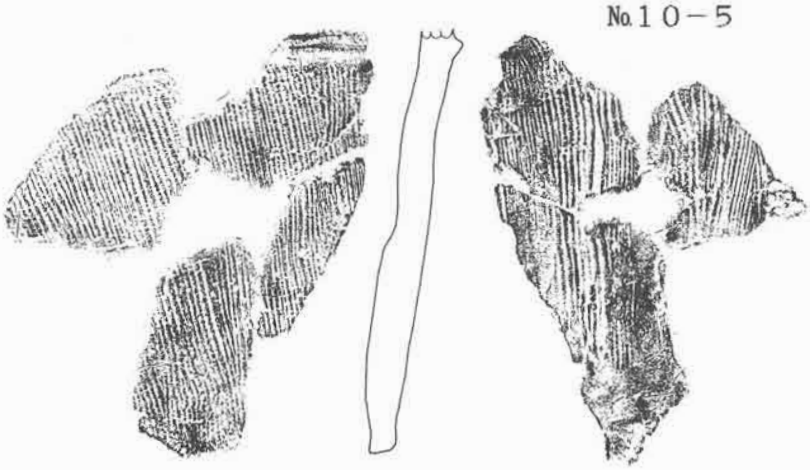
No.10－3



No.10－4

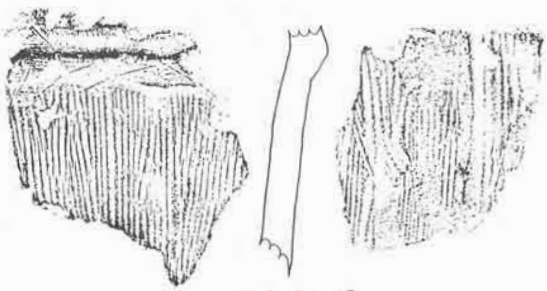


No.10－5



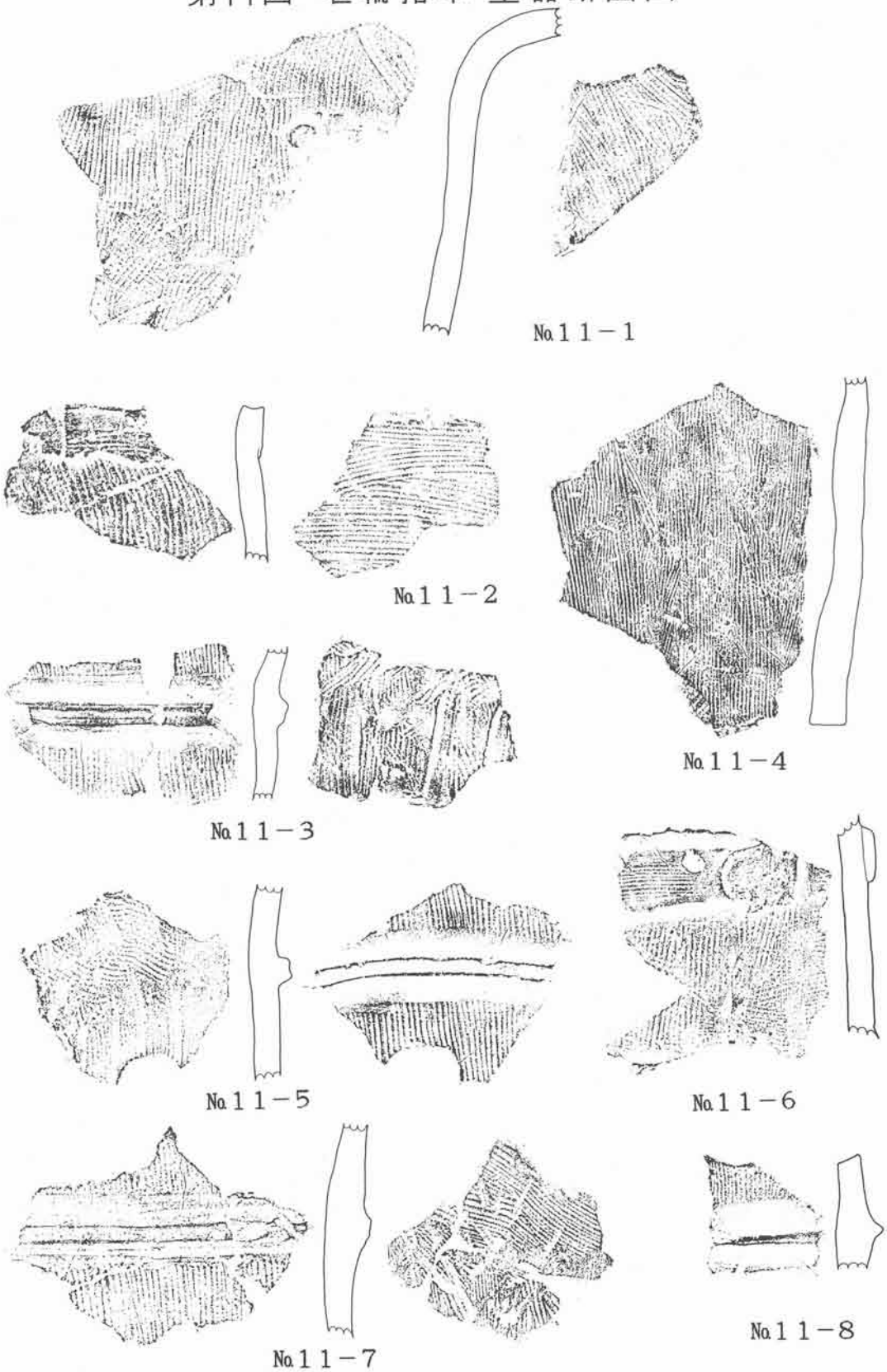
No.10－6

No.10－7

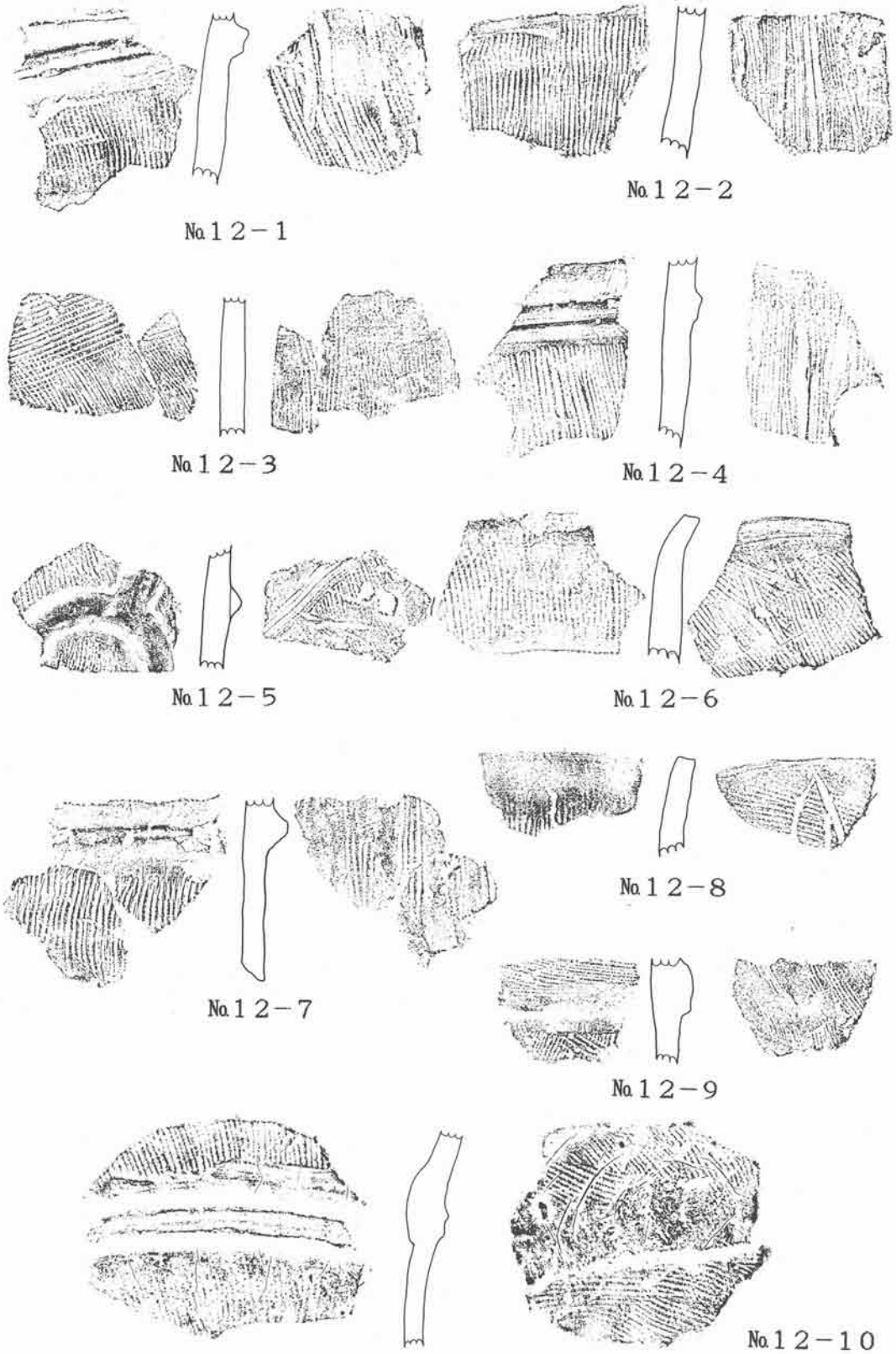


No.10－8

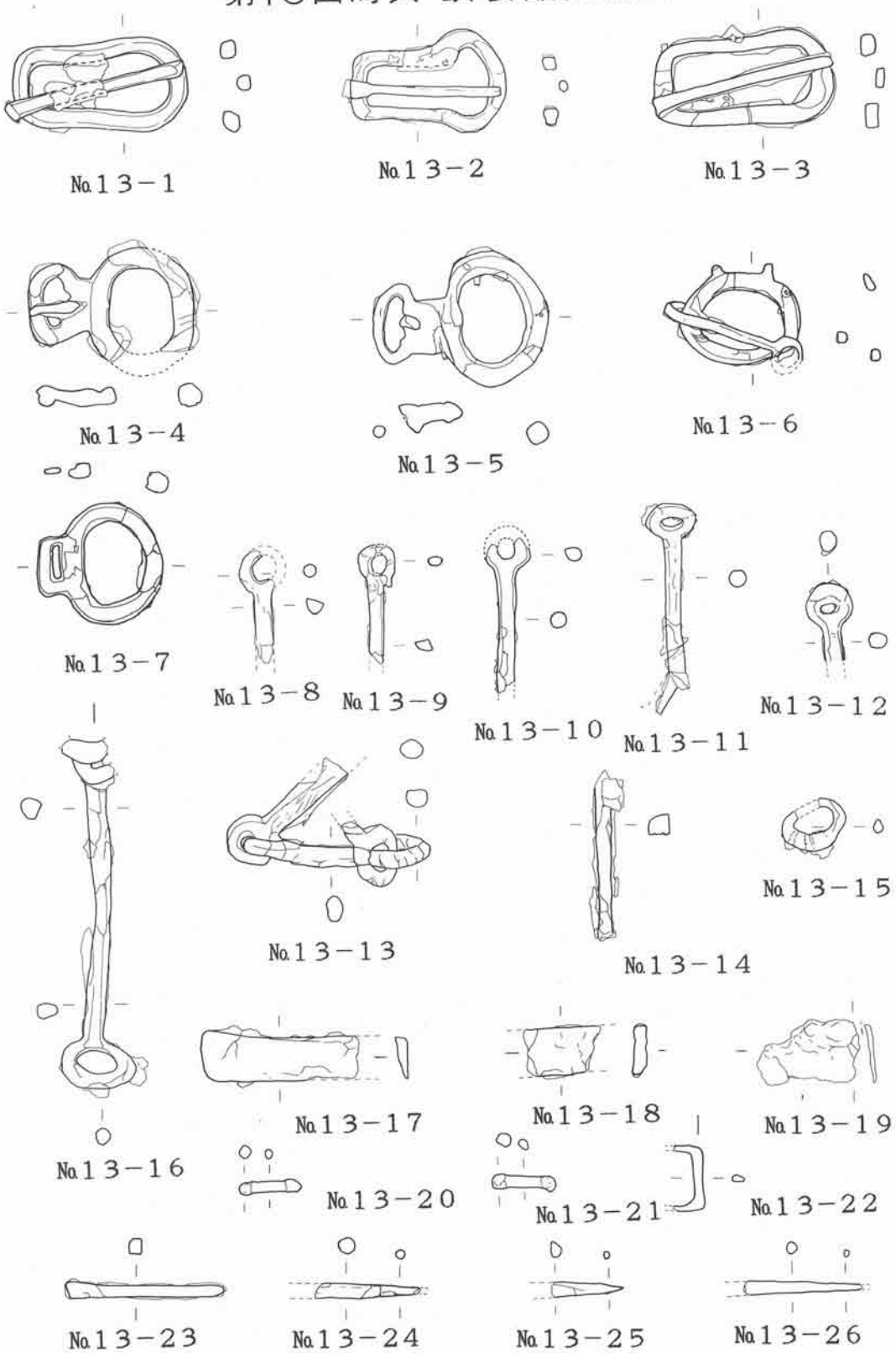
第11図 埴輪拓本・土器断面図



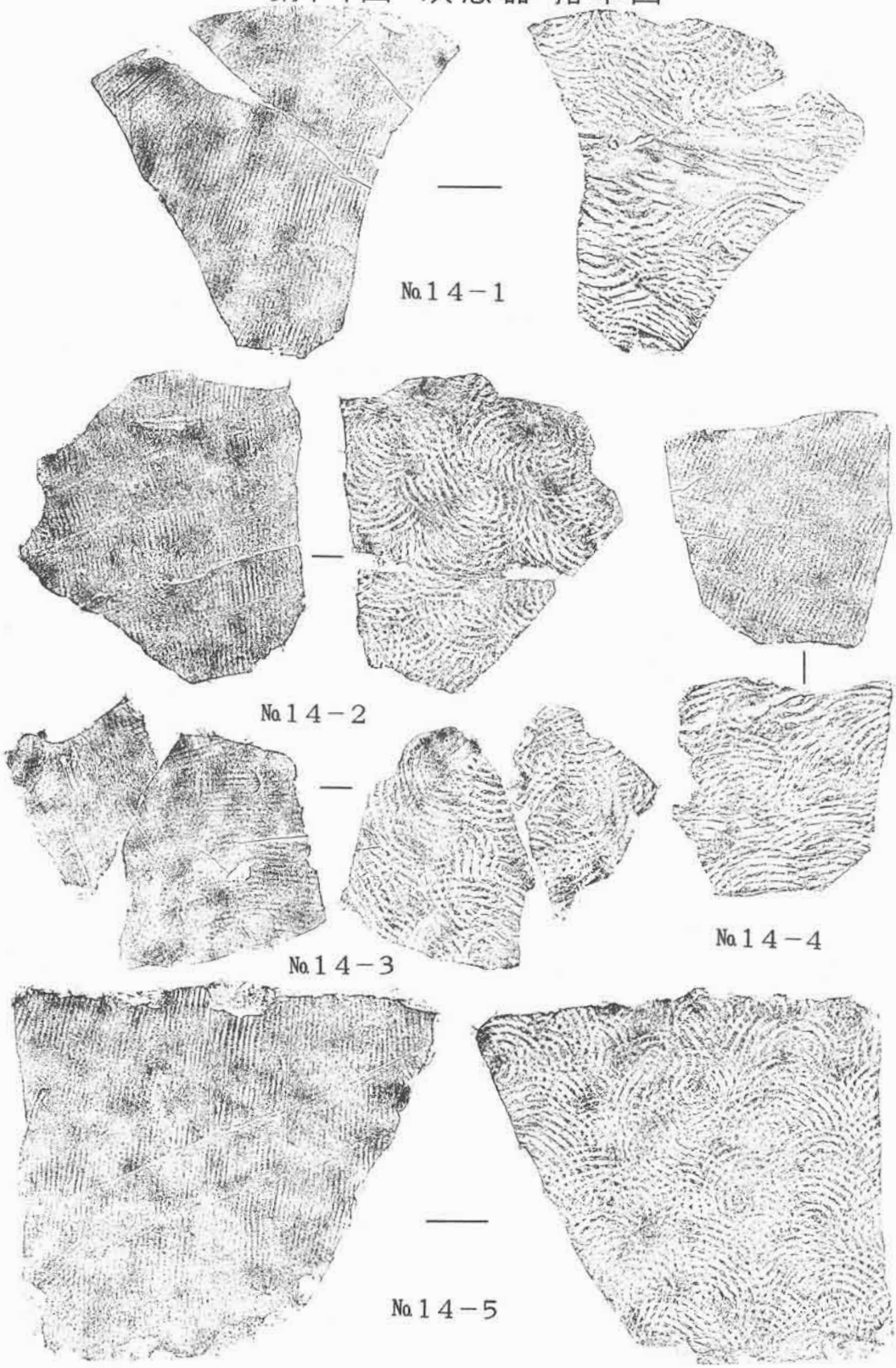
第12図 埴輪拓本・土器断面図



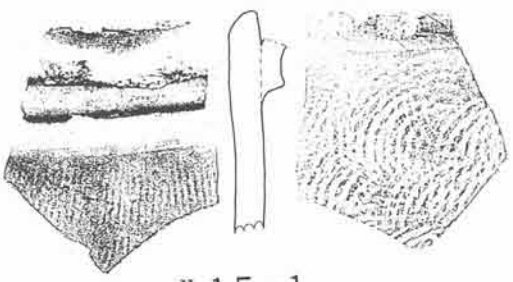
第13図馬具・鉄製品実測図



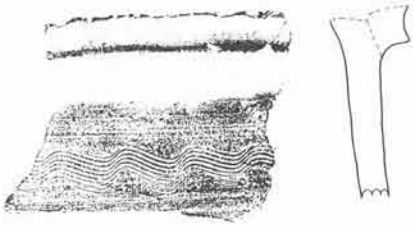
第14図 須恵器・拓本図



第15図 須恵器口縁部拓本・石斧・砥石

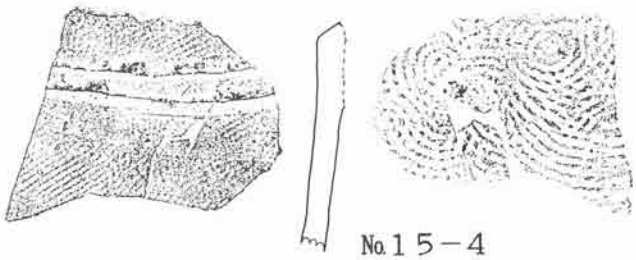


No.15－1

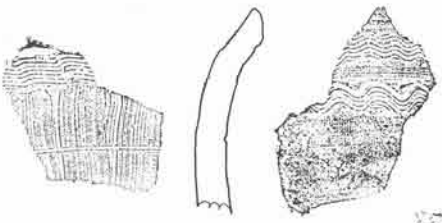


No.15－2

No.15－3

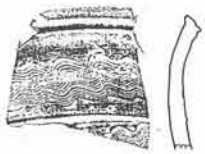


No.15－4

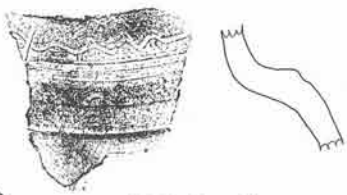


No.15－5

No.15－6

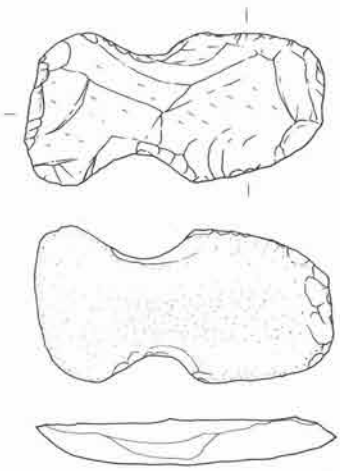


No.15－7

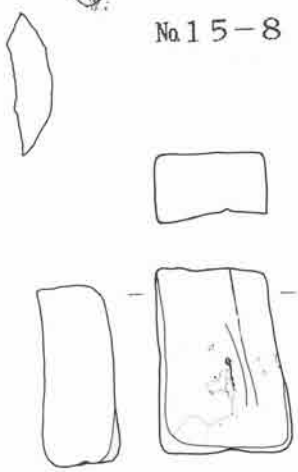


No.15－8

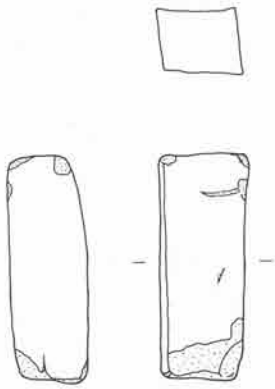
No.15－9



No.15－10



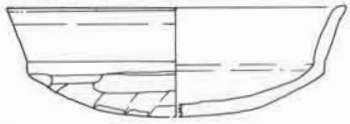
No.15－11



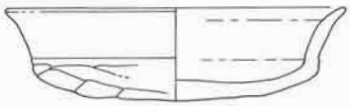
No.15－12

第16図 土師器須恵器実測図

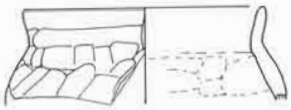
No.16－1



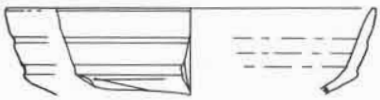
No.16－2



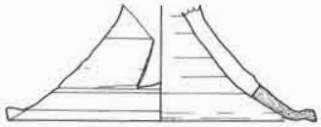
No.16－3



No.16－4

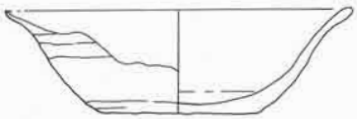


No.16－5



No.16－6

No.16－7



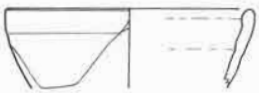
No.16－8

No.16－9

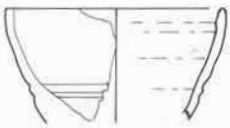
No.16－10

No.16－11

No.16－12

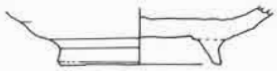


No.16－13



No.16－14

No.16－15



No.16－16

No.16－17

石室内出土遺物（第１３図）

本古墳では墳丘及び石室共に幾度かの攪乱と盗掘を受けており副葬品の一括出土は望むべくもなかったが玄室を精査したところ、石室右壁寄りで鉄鏃４点（２３．２４．２５．２６）両頭座金付留金具２点（２０．２１）が検出された。玄室手前の羨道部より鉸具４点（１．２．３．）が左右の壁際から出土し左側の鉸具は轡と金銅製の装飾具と重なり逢って検出された。（４．５．６．７）は立聞（８．９．１０．１１．１２．１３．１４．１５．１６）は轡の引手から銜の部分と思われる。（１７．１８．１９）は太刀及び小刀の一部と思われる。（２２）は不明。

ま と め

１．本古墳は前橋台地（榛名山二ツ岳泥流層）に小河川によって形成された舌状台地上に存在する横穴式石室を持つ古墳である。

２．墳丘の盛り土はそのほとんどを後世の他の使用目的により失い奥壁裏部分に残っているのみである。

３．裾部も耕作、総社城の堀及び宅地化により著しく変形して行った。調査の結果葺石を持ち埴輪を伴う後期古墳と思われるが二段築成、周堀の有無・墳丘の規模・形状等不明な点が多い。

４．内部主体は輝石安山岩と角閃石安山岩使用の自然石乱石積の横穴式両袖型石室である。石室及び葺石に使用された石材は旧利根川の河原石を使用したものと考えられる。

５．石室の規模は表１の通りである。問題点として、構築に当たり使用尺度があげられる。本古墳の石室のように自然石乱石積の場合計測場所の若干の変化によりその数値に変動をきたす。よってその場合を考慮にいれて推定しても困難な状況が多い。本古墳は高麗尺＝３５cm、唐尺＝３０cmとして換算して検討すると、各実測値において必ずしも整合しないが唐尺使用の場合で完尺数値に近い。よって唐尺使用が推定される。

６．石室は榛名山二ツ岳の火山灰（ＦＡ）降下後周辺の土砂を約２．５mほど盛り上げ良く突き固めた基壇上に葺石及び裏込石と石室の根石を構築したと思われる。石室の根石は２０石（第７図）をもって構成する。石室中央部から奥方向により大きな石を用いている。右壁奥から４石と５石の間が空いているが、他は各石の端部が接しており、壁面は自然石のより平らな部分を使用している。

７．出土遺物に関しては、盗掘を受けた割に多数の遺物が検出された。大正３年に鉄器の出土した事実を地元民により証言されており、石室内からガラスビンの破片・陶器片が出土したことからも、数度の盗掘を受けていることが伺える。

８．埴輪は、円筒埴輪の一部、人物埴輪の破片、馬の埴輪の破片等であり出土地点は前庭部右側と北東部葺石付近に限定しており、川越市牛塚古墳と同様に少量の埴輪を石室前庭部と石室の北側に限定的に樹立した可能性が強いと思われる。埴輪の消滅時期について６世紀末ないし７世紀初頭とするのが妥当な時期と思われる。東国では畿内とは異なり群集墳への埴輪の供給という現象が存在する。７世紀初頭には有力豪族による氏寺の建立が始まり在地首長層

の情熱と財力は仏寺建立に転化して行った事が埴輪祭祀あるいは前方後円墳の消滅のひとつの要因であろうと考えられる。当古墳は埴輪の消滅する直前の古墳と言えるであろう。

※後期古墳の築造年代を考える上で埴輪の有無は参考にしうる１つの要素である。総社町に所在する総社古墳群について概観してみたい。丁寧な葺石で知られる王山古墳は６世紀初頭、時期の違う二石室を持つ総社二子山古墳は全長９０ｍの前方後円墳で埴輪を持ち石室や頭椎太刀等の副葬品から６世紀後半～６世紀末の年代が与えられており、これに続く愛宕山古墳は埴輪を持たない。未調査のため不明な点の多い方墳で１辺５５ｍ７世紀中葉、仏教文化の影響で知られる宝塔山古墳は１辺５５ｍの方墳で有り７世紀後半、７枚の巨大な輝石安山岩で石室を築き壁面には漆喰の痕跡がみられる蛇穴山古墳は１辺４０ｍの方墳で有り８世紀初頭とされている。この事から前方後円墳から方墳という墳形の変化とともに埴輪も消滅するとみられる。古墳時代の代表的な古墳を持つ総社古墳群の中にあって、当稲荷山古墳の時期決定の根拠の１としては基壇直下に榛名山二ツ岳形成時に噴出された降下火山灰層（ＦＡ）が存在する。故尾崎喜佐雄博士を先鞭に数多くの研究者によってこの火山灰層が形成されたのは６世紀前半頃と位置付けられている。その２として本古墳石室裏込石の中に角閃石安山岩（二ツ岳降下軽石ＦＰ）が存在し、河原石のように摩耗している。ＦＰの噴出が６世紀後半頃とするならば、それ以降に石室は築かれたこととなる。その３として石室南東部出土の坏（№１６－５）は口縁部中位に段を持つ事から６世紀第３四半期と考えられる。

参 考 文 献

前橋市史第１巻		前橋市	１９７１年
金冠塚（山王二子山）古墳調査概報		前橋市教育委員会	１９８１年
群馬文化　２７８号		群馬県地域文化研究協議会	１９８６年
角川「日本地名大辞典　１０」群馬県		角川書店	１９８８年
群馬県遺跡台帳Ｉ東毛編		群馬県文化財保護協会	１９７４年
群馬県古墳概観		群馬県	１９３６年
上毛古墳綜覧		群馬県	１９３６年
群馬県史資料編　３　原始古代３古墳		群馬県	１９８１年
横穴式古墳の研究	尾崎喜左雄	吉川弘文館	１９６６年
群馬・埼玉の埴輪		あさを社	１９８７年
古城塁史の研究	山崎　一	群馬県文化事業振興会	１９７１年
牛塚古墳	川越市史	埼玉県川越市	１９６５年
陶邑古窯址群Ｉ		平安学園考古学クラブ	１９６６年
陶邑Ｉ～Ｖ　大阪府文化財調査報告書		大阪府教育委員会	１９６６年
考古学ジャーナル　１５７		遺跡の年代と火山噴出物の降下年代	１９７９年
下郷遺跡		群馬県教育委員会	１９８０年

第６章　近世の石造物と遺構

庚申塔と青面塔

庚申信仰は６０日に１度めぐってくる、干支の庚申の日に行われる信仰行事である。この行事の源流は中国の道教にみられる。人間の体内にいる三尸（サンシ）と呼ばれる虫が、人が寝ている間に抜け出して、天帝にその人の罪過を告げ、その結果天帝はその人を早死にさせるといわれている。それを防ぐために身を慎んで徹夜をするのである。この徹夜を守庚申という。守庚申は奈良時代末から貴族階級に取り入れられたが、初めは遊興が主であった。平安時代に入って僧侶が「庚申縁起」を作るに及び、しだいに仏教的色彩を帯びるようになってきた。江戸時代になると修験道や神道の関与もあり、庚申信仰は農民層に広く浸透し庚申講は全国各地で行われるようになった。庚申を祀る組織は庚申講などと呼ばれ、１０人前後の講集団が村にいくつかできていた。江戸時代における結衆のあり方を調べていくうえにも庚申塔は重要な資料である。我が国最古の庚申塔は埼玉県川口市領家の実相寺にある文明３年（１４７１）の板碑である。群馬県最古の庚申塔は天文１７年（１５４８）の庚申塔である。この塔は桐生市川内町の干手寺にある。青面金剛は庚申の主尊といわれ、その形態は儀軌では四手となっている。

表－２　　庚申塔と青面金剛

種　別	塔　数	初出年号	一　覧　表　No.
庚　申　塔	４９（０）	天保１５年 (1844)	1. 3. 4. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 19. 20. 21. 23. 26. 27. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 49. 51. 52. 53. 54. 57. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65
青　面　塔	１７（２）	天保１５年 (1844)	2. 5. 6. 16. 17. 18. 22. 24. 25. 28. 41. 48. 50. 55. 56. 58. 66
庚申青面金剛	１（１）	元文５年	67

各塔を標記文字で分類して見ると庚申４５基、庚申塔４基、青面１５基、大青面１基、青面尊１基、庚申青面金剛１基合計６７基となる。本遺跡内で検出された塔はすべて文字塔であり自然石を幅の広い部分を天とし、狭く尖った方を地としている。最大の庚申青面金剛No.６７は台石の上に調査直前まで建てられていたが、伐採により調査に入った時点では倒壊していた。台石は浅間の火山弾で出来たものが１０基、日月の刻まれたものが２基存在した。（No.３３、No.６７）

石臼

Ｉ－４グリット内の現存駐車場との境に積まれていた。石垣中より出土した、粉挽き臼の上臼、径３７．６cm、現存高１０．４cm、くぼみ２．２cm、ふくみ０．６cm、挽手孔３．８cm、芯棒上面径２．９cm、下面径４．７cm、深さ２．６cm、供給口４．０cm、重量１０．５kg

No.６８はＦ－３グリットで確認する。墳丘頂上部に近年迄設置されていた石祠の笠と思われる。

No.６９は東側駐車場との境界の石垣に組み込まれていた近世墓塔の笠である。

砥石

№１１、№１２共に４面使用痕のある砥石が出土している。

墓壙

墳丘の土層断面確認のため、石室の主軸方向に対し直角方向（Ｆ－５グリット付近）に重機でトレンチを入れたとき、２基の近世墓壙が確認された。墓壙１からは菊皿２枚草花文皿１枚と布に包まれた寛永通寶１３枚（№１～№１３）銅製金具３個が検出され、墓壙２からは菊皿１枚と寛永通寶４枚（№１４～№１７）と元豊通寶１枚（№１８）が検出された。

墓壙出土遺物

１．口径１３．７ｃｍ　底径５．９ｃｍ　器高４．３ｃｍで口縁部の一部欠損、オリーブ灰褐色の釉を施した付け高台の菊皿である。内面釉下に布目痕、高台部内側に菱形文を施し３ヶ所のピン痕が見られる。花弁は１０枚外側素地の部分は灰白色を呈している。口唇部は篦により鋭く花弁状に整形されている。

２．口径１３．８cm、底径６．４cm、器高４．３cm、硬質、口縁の一部欠損、オリーブ褐色の釉を施した。その他の特徴は１に同じ。

３．口径１２．２cm、底径７．９cm、器高２．３cm、外面回転ナデ裏に刷毛による施釉痕と３ヶ所の「目あと」あり、内面に草花文が見られる。

４．口径１４．３cm、底径６．１cm、器高４．３cm口唇部は発泡している。オリーブ灰色の釉を施す。特徴は１・２に同じでこの３枚の皿を見ると同じ型及び規格によって造られた事が理解される。

銅銭について

№２７は開元通寶、唐の武徳４年（６２１）から唐代末まで通用し、日本の和銅開珎もこれにならった。№２１は皇宋通寶、寶元２年（１０３９）以降北宋で鋳造されたもの。№１７№２２は北宋銭の元豊通寶、元豊年間（１０７８年）を模した長崎銭系模鋳銭と思われる。№２０は元祐通寶、北宋　元祐８（１０９３）年以降の鋳造。以上５点は渡来銭及び模倣銭である、次に掲げるものは№３０以外は寛永通寶と称される範疇のものである。№１９は寛永３年（１６２６）～１７年（１６４０）常陸国水戸銭。№１№２９は寛永１３年（１６３６）５月以降武蔵国浅草橋場銭。№２№３№４№６№７№８№９№１０№１１№１２は寛永１３年６月以降江戸芝綱縄手銭。№１３は寛永１３年６月から近江国坂本銭。№５は寛永１４年～１７年三河国吉田銭。№２８は寛文８（１６６８）年５月～天和３（１６８３）年、江戸亀戸村銭、裏面に「文」字あり。№２４は同じく江戸亀戸村鋳、元禄１０（１６９７）年寶永元年（１７０４）江戸亀戸銭。№２６は天文２（１７３７）年１１月以降出羽国秋田銭。№２５は元文３年（１７３８）５月以降鋳造された出羽国秋田銭。№１６№１８は江戸亀戸銭、明和２年（１７６５）９月。№２３は明和５年　江戸亀戸銭。№１４№１５は古寛永を写したものと思われる。№３０は明治１９年の半銭。

和鏡

蝋形鋳造法から型土の上に直接篦で文様を押しくぼめる方法で、裏面に南天の文様と藤原光長

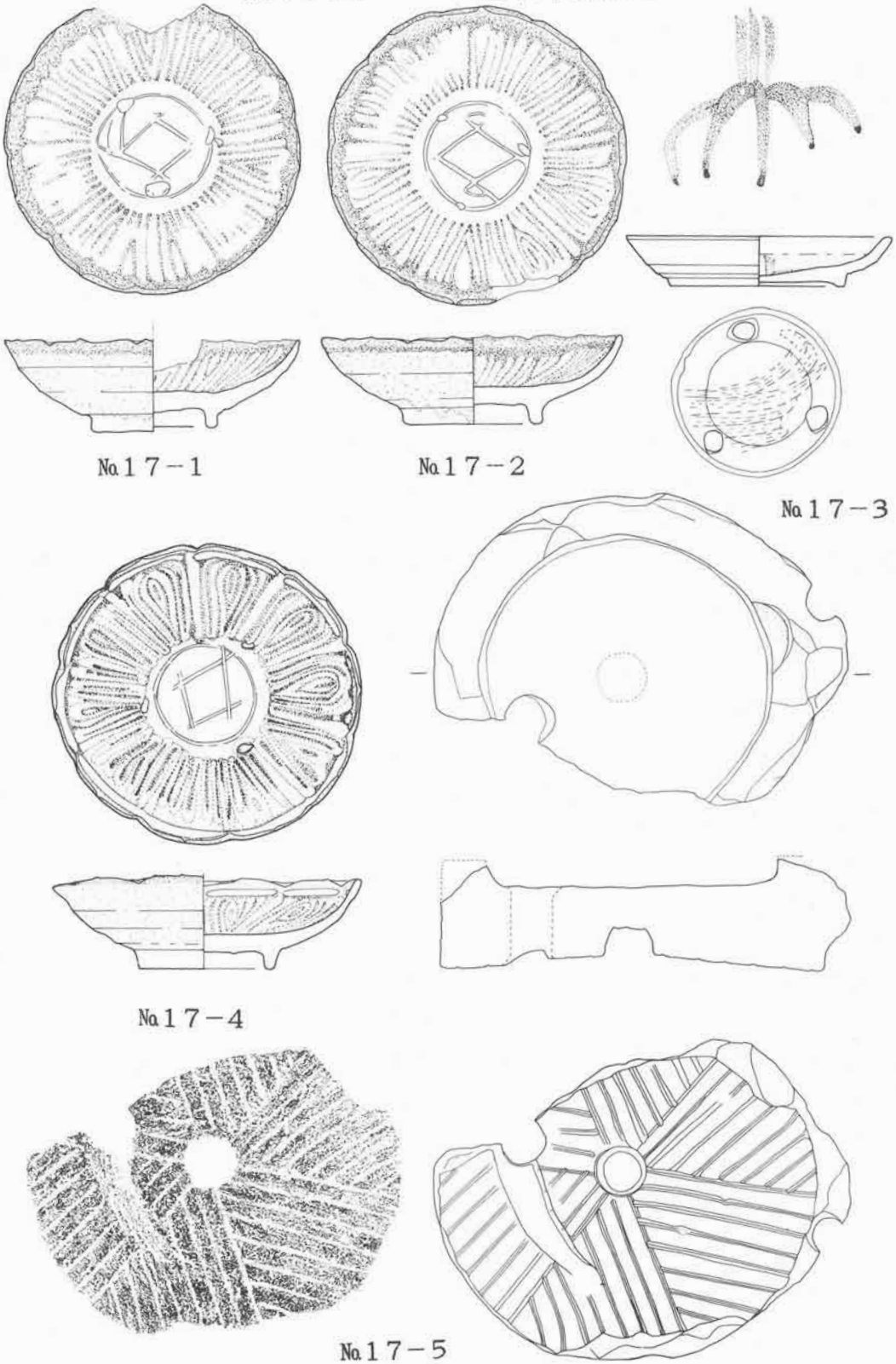
の名があり、縁は狭く鏡面は平である。この形式は桃山時代から江戸時代にかけて造られた柄鏡である。

本遺跡では、基本土層に示したように墳丘下にローム層の上面が確認された。このローム層中に包蔵されていたと考えられる縄文土器片が封土中より出土した。概ね縄文前期黒浜式土器と諸磯式土器である。№１３は縄文中期と考えられる。又、分銅形石斧が１点出土している。本遺跡周辺に縄文時代の遺構の存在が伺われる。

参 考 文 献

塚廻り古墳群	群馬県教育委員会	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団	１９８０年
奥原古墳群	群馬県教育委員会	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団	１９８３年
榛東村９号墳発掘調査		榛東村教育委員会	１９８５年
中ノ峯古墳発掘調査報告書		子持村教育委員会	１９８０年
季刊「考古学」第２４号		雄山閣	１９８８年
清里・陣場遺跡	群馬県教育委員会	群馬県埋蔵文化財調査事業団	１９８１年
史跡　観音山古墳		群馬県教育委員会	１９８１年
岩波講座　日本歴史　古代２		岩波書店	１９６２年
日本の考古学　Ⅳ・Ⅴ		河出書房	１９６６年
日本の古代　前方後円墳の世紀		中央公論社	１９８６年
日本の美術　埴輪		至文堂	１９６７年
日本の美術　古墳		至文堂	１９７１年
考古学ライブラリー３４　馬具　３７埴輪		ニューサイエンス社	１９８５年
糸井宮前遺跡	群馬県教育委員会	群馬県埋蔵文化財調査事業団	１９８６年
天神風呂遺跡		大胡町教育委員会	１９８１年
上大屋・樋越地区遺跡群		大胡町教育委員会	１９８６年
日本の陶磁		東京国立博物館	１９８５年
日本陶器の鑑定と観賞		金園社	
日本石仏図典		国書刊行会	１９８６年
伊勢崎の近世石造物		伊勢崎市	１９８５年
寛永通寶銭譜		大成堂	１９６７年
昭和古銭価格圖譜（全）		大成堂	１９６５年
考古学ライブラリー　４５　出土渡来銭		ニューサイエンス社	１９８６年
武蔵野国府関連遺跡調査報告　Ⅳ		府中市教育委員会	１９８１年
日本考古学小辞典、		ニューサイエンス社	１９８３年
日本の美術　２陶磁		至文堂	１９８６年
考古学ライブラリー　１７　美濃焼		ニューサイエンス社	１９８３年

第17図 近世遺物実測図



第18図 銅銭拓本

墓壙1－1

墓壙1－2

墓壙1－3

墓壙1－4

墓壙1－5

墓壙1－6

墓壙1－7

墓壙1－8

墓壙1－9

墓壙1－10

墓壙1－11

墓壙1－12

墓壙1－13

墓壙2－1

墓壙2－2

墓壙2－3

墓壙2－4

墓壙2－5

第19図 銅銭・和鏡拓本

石室内－1

石室内－2

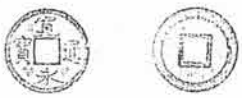
G－2グリット(石室上)

G－2グリット(石室)

石室前庭部

墳丘北東斜面

墳丘



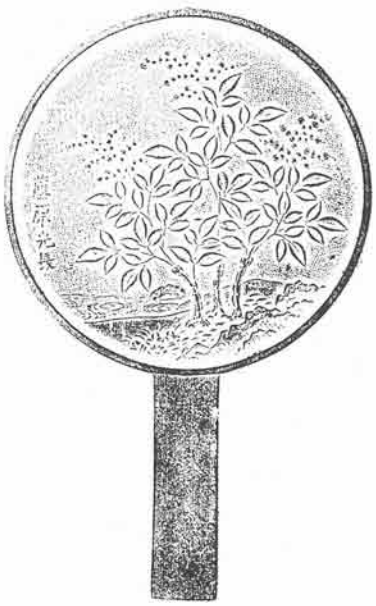
墳丘

墳丘

一括

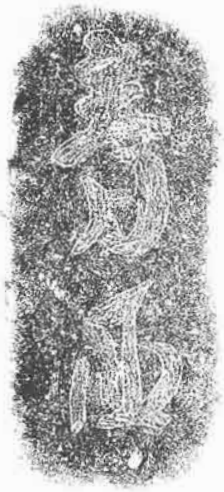
一括

F－2グリット



F－2グリット(稲荷社内)

第20図 庚申塔拓本



No.2 高さ51㎝ 幅25㎝

No.1 高さ45㎝ 幅24㎝

No.3 高さ64㎝ 幅39㎝

No.4 高さ54㎝ 幅30㎝

No.6 高さ90㎝ 幅36㎝

No.5 高さ52㎝ 幅33㎝

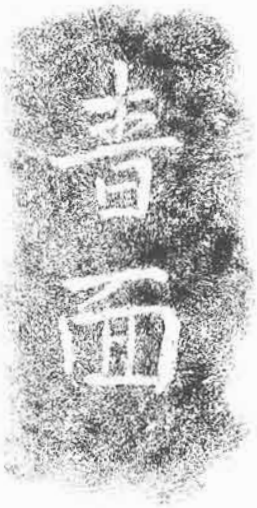
第21図 庚申塔拓本

No.13 高さ53cm 幅19cm

No.14 高さ46cm 幅29cm

No.15 高さ45cm 幅27cm

No.16 高さ57cm 幅38cm



No.17 高さ45cm 幅32cm

No.18 高さ52cm 幅32cm

第22図 庚申塔拓本

No.7 高さ59cm 幅33cm

No.8 高さ45cm 幅30cm

No.9 高さ47cm 幅26cm

No.10 高さ80cm 幅29cm

No.12 高さ58cm 幅32cm

No.11 高さ45cm 幅30cm

第23図 庚申塔拓本

No.20 高さ48cm 幅32cm

No.19 高さ71cm 幅27cm

No.21 高さ47cm 幅31cm

No.24 高さ48cm 幅30cm

No.23 高さ53cm 幅29cm

No.22 高さ41cm 幅23cm

第24図 庚申塔拓本

No.25 高さ44㎝ 幅27㎝

No.26 高さ47㎝ 幅25㎝

No.27 高さ41㎝ 幅26㎝

No.28 高さ54㎝ 幅30㎝

No.29 高さ41㎝ 幅24㎝

No.30 高さ49㎝ 幅27㎝

第25図 庚申塔拓本

No.31 高さ43cm 幅26cm

No.33 高さ70cm 幅37cm

No.32 高さ59cm 幅26cm

No.34 高さ54cm 幅32cm

No.35 高さ46cm 幅31cm

第26図　庚申塔拓本

No.36 高さ48cm 幅32cm

No.37 高さ50cm 幅28cm

No.38 高さ55cm 幅23cm

No.39 高さ40cm 幅26cm

No.40 高さ51cm 幅28cm

No.41 高さ51cm 幅31cm

第27図 庚申塔拓本

No.42 高さ54cm 幅22cm

No.43 高さ52cm 幅29cm

No.44 高さ45cm 幅25cm

No.45 高さ57cm 幅38cm

No.47 高さ77cm 幅35cm

No.46 高さ48cm 幅27cm

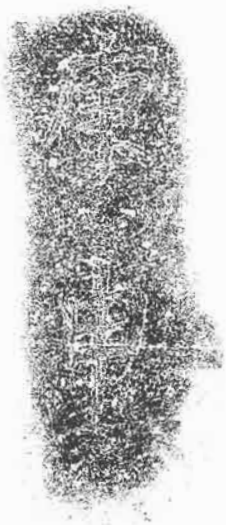
第28図 庚申塔拓本

No.48 高さ50cm 幅33cm

No.49 高さ47cm 幅30cm

No.50 高さ42cm 幅21cm

No.51 高さ53cm 幅23cm



No.52 高さ50cm 幅25cm

No.53 高さ52cm 幅26cm

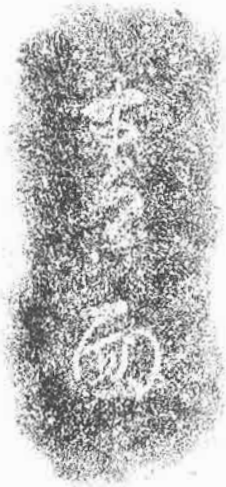
第29図 庚申塔拓本

No.54 高さ40cm 幅18cm

No.55 高さ59cm 幅34cm

No.56 高さ51cm 幅28cm

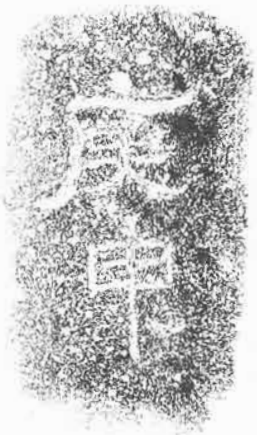
No.57 高さ53cm 幅34cm



No.58 高さ50cm 幅22cm

No.59 高さ41cm 幅27cm

第30図 庚申塔拓本



No.60 高さ43cm 幅28cm

No.61 高さ48cm 幅30cm

No.62 高さ51cm 幅28cm

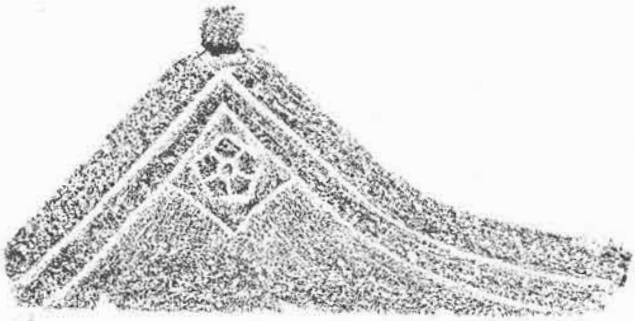
No.63 高さ44cm 幅32cm

第31図 庚申塔拓本

No.64 高さ44cm 幅29cm

No.65 高さ45cm 幅25cm

No.66 高さ37cm 幅23cm



No.68 高さ20cm 笠の幅40.5cm

No.69 高さ17.5cm 笠の幅46cm

第32図　縄文土器拓本

No.32－1

No.32－2

No.32－3

No.32－4

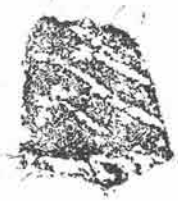
No.32－5

No.32－6

No.32－7

No.32－8

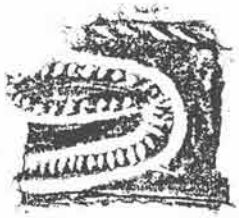
No.32－9



No.32－10

No.32－11

No.32－12



No.32－13

No.32－14

No.32－15

No.32－17

No.32－16

No.32－18

図版1

石　室　全　景

石室と葺石

稲荷山古墳全景

稲荷山古墳近景（北東方向から）

調査前（南より）

図版2

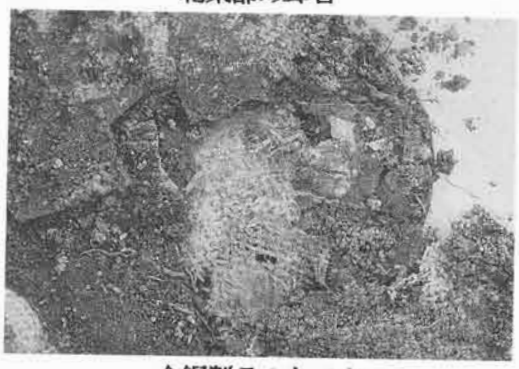
土層断面と裏込石

裏込石中の角閃石安山岩

裏込石（北側より）

北東部の葺石

鉄鏃（石室内出土状況）



金銅製品のあて布

羨道部馬具出土状況

羨道部馬具出土状況

図版3

羨道部より奥壁を望む

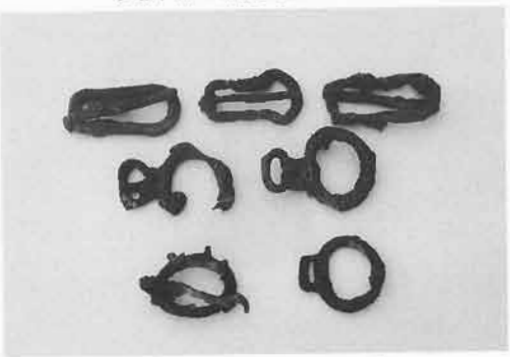
玄室より羨道部を望む

帯金具（石室内）

稲荷社基壇（葺石の転用？）

天井石・排除作業風景

凹石・墳丘頂上部出土



馬具(13-1・2・3・4・5・6・7)

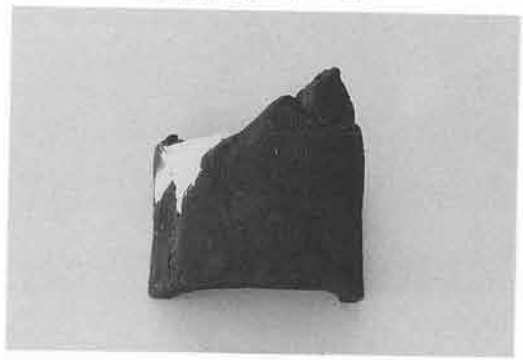
馬具(13-13・16)

図版４

埴輪（人面）No.９－２

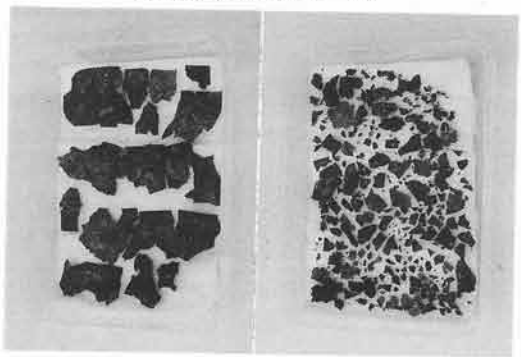
埴輪胴部No.９－４

埴輪基底部No.９－５

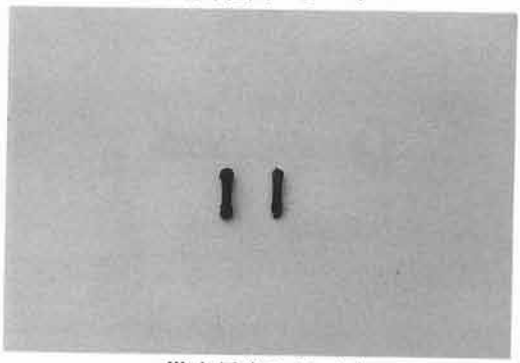


埴輪基底部No.９－６

円筒埴輪No.９－７



金銅製品



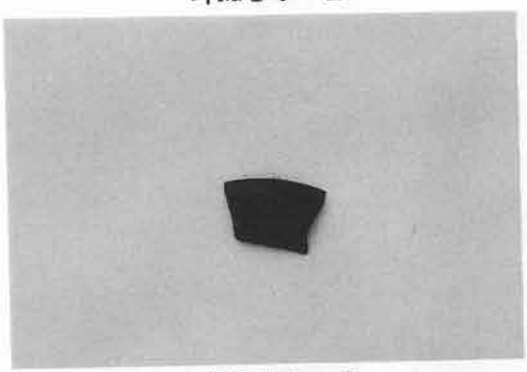
帯金具(13-20･21)

高坏脚部No.１６－１

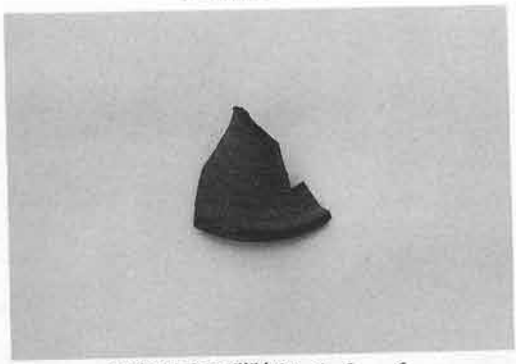
図版５

坏No.１６－２

坏No.１６－３



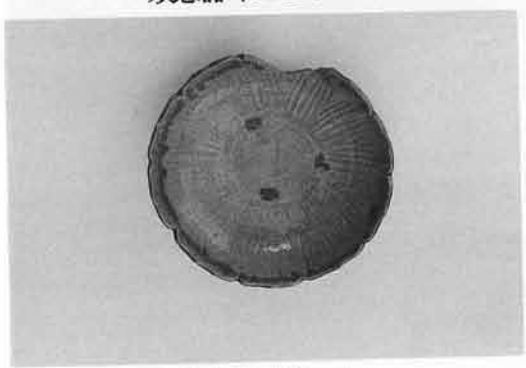
坏No.１６－５



須恵器高坏脚部No.１６－６

須恵器坏No.１６－８

高台付椀No.１６－１２



菊皿No.１７－１

庚申塔No.３３

図版６

庚申№４７

大青面№５

庚申№１０　　青面尊№６　　青面№１７

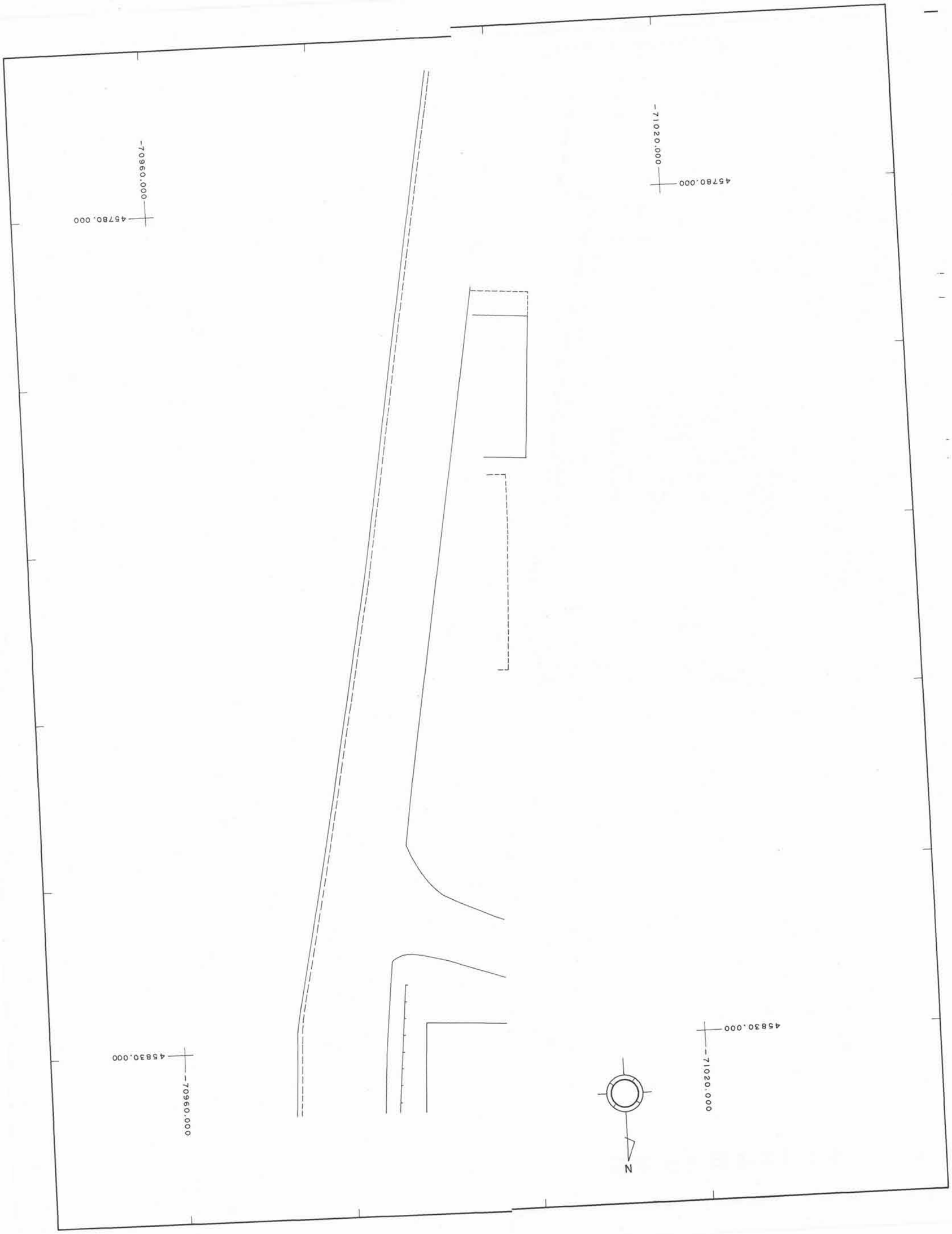
庚申青面金剛№６７　　稲荷社と庚申塔（北より）　　稲荷社と庚申塔（南より）

稲荷山古墳

昭和63年11月10日　印刷
昭和63年11月20日　発行

編集　スナガ環境測設株式会社
発行　前橋市教育委員会
　　前橋市埋蔵文化財発掘調査団

印刷　上毎印刷工業株式会社


-71020.000
45780.000
-70960.000
45780.000
45830.000
-71020.000
45830.000
-70960.000
N